

# 西谷地区発掘調査報告書

(山合的場遺跡・殿河内遺跡・寺ヶ台前田遺跡)

2004

津和野町教育委員会

# 西谷地区発掘調査報告書

(出合的場遺跡・殿河内遺跡・寺ヶ台前田遺跡)

2004

津和野町教育委員会

口絵



寺ヶ台前田遺跡出土の板状鉱滓

## 序

山陰の小京都として知られる津和野町には、恵まれた自然環境の中で先人たちが生活していた証である貴重な文化財が数多く残されています。今回、西谷地区で県営中山間地総合整備事業に先だって発掘調査をおこないました。発掘調査の結果、中世から近世にかけての金属生産関係遺物などが出土し、中世集落変遷の一端が次第に明らかになってきました。

本書が埋蔵文化財の理解・普及に寄与し、学校教育・社会教育・学術研究の一資料として活用いただければ幸いです。最後になりましたが、発掘調査に際して多くなご理解・ご協力をいたしました島根県益田農林振興センター及び関係各位に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成16年3月25日

津和野町教育委員会  
教育長 斎藤 敦弘

## 例　　言

1. 本書は、津和野町教育委員会が2002(平成14)年度に島根県益田農林振興センターから委託を受け実施した、島根県鹿足郡津和野町大字邑蘿、通称西谷・出合地区に所在する出合的場遺跡・殿河内遺跡・寺ヶ台前田遺跡の発掘調査報告書である。調査費の一部については、文化庁国庫補助費を使用している。

2. 調査にあたっては、下記の方々に遺跡・遺物についてご指導いただいた。記して謝意を表します。(敬称略)

伊藤徳広(島根県教育庁文化財課)、松島 弘(津和野町文化財保護審議会会長)、  
渡辺一雄(梅光学院大学)

3. 調査にあたっては、下記の方々にご協力いただいた。記して謝意を表します。(敬称略)

岩本匠、斎藤勲、前田賛(土地所有者)

水津満男、西尾克巳、守岡正司、渡辺聰、有原八郎、近藤英隆、宮本正保、澤田正明、椿真治、角田徳幸、東春晋、池田善文、森田孝一、遠藤浩巳、大野芳典

4. 金属遺物分析については村上隆氏(奈良文化財研究所)に依頼し玉稿を賜った。記して謝意を表します。また、一部の分析については、佛コペレコ科研に委託しており、附録1はこの分析内容に基づく。

5. 出土陶磁器については村上勇氏(広島県立美術館)に鑑定いただいた。記して謝意を表します。

6. 出土石製品については、松里英男氏(山口地学会)に表面観察による石材同定をいただいた。記して謝意を表します。

7. 自然科学分析業務については文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。

8. 本書に用いた方位は、第1~3図は真北、その他の図は国土調査法第III座標系に基づく座標北(日本測地系)である。

9. 本書に用いた土色は下記に準拠した。

農林水産省農林水産技術会議事務局(監修)『新版標準土色帖』1998年版

10. 遺物注記等に用いた調査番号は下記のとおりである。

出合的場遺跡 第1次調査 DMB-1

殿河内遺跡 第1次調査 TNG-1

寺ヶ台前田遺跡 第1次調査 TDM-1

11. 遺構番号は遺構種別ごとの番号とし、下記略号をもちいた。連続して調査することとなった3遺跡での遺構番号の混乱を避けるため、遺構番号は下記のとおりとした。(一部欠番あり)  
S B : 据立柱建物跡、S D : 潟、S K : 土坑、S X : その他の遺構、S P : ピット・柱穴

遺跡名	S B	S D	S K	S X	S P
出合的場遺跡	-	-	-	-	-
殿河内遺跡	1~5	-	1~5	1~8	1~44
寺ヶ台前田遺跡	11~19	1~9	11~52	11~38	101~750

12. 調査に伴う記録類及び出土遺物は、津和野町教育委員会で保管している。

13. 本書は永田・椋木の協力のもと、官田が編集にあたった。

## 目 次

第1章 西谷地区発掘調査の経緯.....	1
第1節 発掘調査に至る経緯	
第2節 調査体制	
第3節 調査の経過と方法	
第2章 位置と環境.....	2
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 発掘調査の結果.....	7
第1節 出合的場遺跡の調査.....	7
第2節 駿河内遺跡の調査.....	10
第3節 寺ヶ台前田遺跡の調査.....	17
第4章 まとめ.....	55

### 付編

1. 津和野寺ヶ台前田遺跡から出土した「鉱滓」について ..... (奈良文化財研究所 村上隆)	56
2. 島根県津和野町寺ヶ台前田遺跡における自然科学分析 ..... (文化財調査コンサルタント㈱ 渡辺正巳・古野毅)	61

## 第1章 西谷地区発掘調査の経緯

### 第1節 発掘調査に至る経緯

西谷地区において県営中山間地総合整備事業（ほ揚整備）が計画され、事業主体である島根県益田農林振興センターと津和野町教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねてきた。遺跡の詳細な範囲を事前に把握するために、2000（平成12）年度には西谷出合地区全域について国庫補助事業として試掘調査を実施した。その後、事業主体者と再協議の結果、遺跡の確認された範囲のうち掘削される部分について本発掘調査をおこなうこととなった。2002（平成14）年度に本発掘調査をおこない、2003（平成15）年度に発掘調査報告書を作成することとなった。

### 第2節 調査体制

今回の調査体制は、下記のとおりである。

調査主体	津和野町教育委員会	教育長	斎藤 数弘
事務局	〃	教育次長	斎藤 誠、廣石 修
		文化係	米本 潔
調査担当者	〃	文化係	宮田 健一
調査補助員	〃	嘱託	永田 茂美
調査補助員	〃	臨時職員	椋木 牧子
発掘作業員			
			青木正充、青木正子、岩本昭子、岩本和子、岩本トヨ子、前田貢、村上茂子、岩本二郎、波田香保里、耕野保、篠本静夫、出本孝人、三浦久男、河野実、倉増信男、石井忠、陶山晃

### 第3節 調査の経過と方法

発掘現地調査は2002年9月11日～10月10日に出合の場遺跡、10月16日～11月29日に殿河内遺跡、12月2日～2003年3月10日に寺ヶ台前田遺跡の順に実施した。発掘調査後には町広報誌上に発掘速報を掲載した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

現在の行政区は、津和野町大字邑解、西谷・出合地区である。津和野市街地からは、直線距離にして約5km北西方向の位置にある。遺跡は標高約210mに位置し、津和野川の支流である白石川・西谷川に隣接する。白石川と西谷川の合流する出合地区には出合的場遺跡があり、出合地区から西南西方向に延びた長さ約2kmの細長い谷盆地である西谷地区には、殿河内遺跡と寺ヶ台前田遺跡がある。なお、西谷地区は地元では通称「にしだん」と呼ばれる。

### 第2節 歴史的環境

津和野の歴史は、これまでのところ縄文時代早期にまで遡り、高田遺跡、山崎遺跡からは押型文土器が出土している。また、高田遺跡からは中期の阿高式、後期中頃の鐘崎式土器がまとまって発見され、対岸の大蔭遺跡からは後期後半の西平式土器が採集されるなど、当時この地域が九州地方の情報の及ぶ範囲であったことが窺える。弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての集落が高田遺跡で確認され、在地の土器群に混じって吉備地方から運ばれてきた外来的土器が発見されている。町内の古墳は、津和野川最上流の木部地区において鍛冶原古墳群が確認されているのみである。高田遺跡からは奈良・平安時代の綠釉陶器、皇朝十二銭の一つ承和昌寶(836年初鋤)、大量の土師器、須恵器が発見されており、当時石見国鹿足郡能濃郷(元美濃郡鹿足郷)と呼ばれていたこの地域の重要な拠点が高田地区にあったものと思われる。

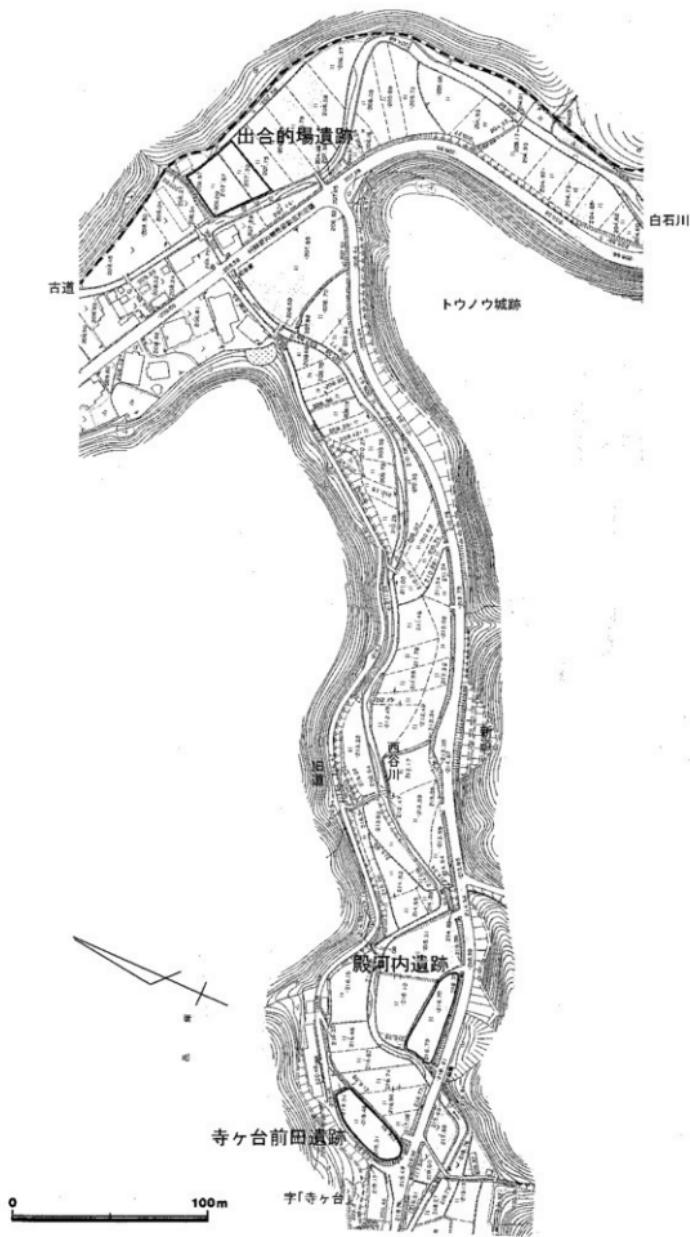
中世津和野の領主吉見氏は、弘安5(1282)年に元寇再防備のため能登国から津和野北部の木部地区に入り、その後14C代に津和野城を構えたと伝えられている。文献では吉見氏入部以前の記録はほとんど残されていないが、これまでの高田遺跡の発掘調査では12・13C代の白磁が大量に出土しており、吉見氏入部以前に津和野地方に有力者が存在していたことが考古学的証拠によって明らかになりつつある。中世の津和野城の大手口は近世以降の大手口とは反対側の御門にあったと伝えられ、吉見氏の居館も同地に存在していたとするのが通説である。西谷地区には「的場」・「殿河内」・「寺ヶ台」・「前田」などの中世村落の様子を示唆する字名が残り、寺ヶ台五輪塔など中世以降の石造物も見受けられる。

関ヶ原の戦後、吉見氏は毛利氏に伴い萩に移るが、その後坂崎出羽守の16年間の治領となり、津和野城の大改築・城下町整備など、現在の町並みの基礎となる大事業が行われた。その後、亀井氏11代225年間の治世を経て明治維新を迎えることとなる。

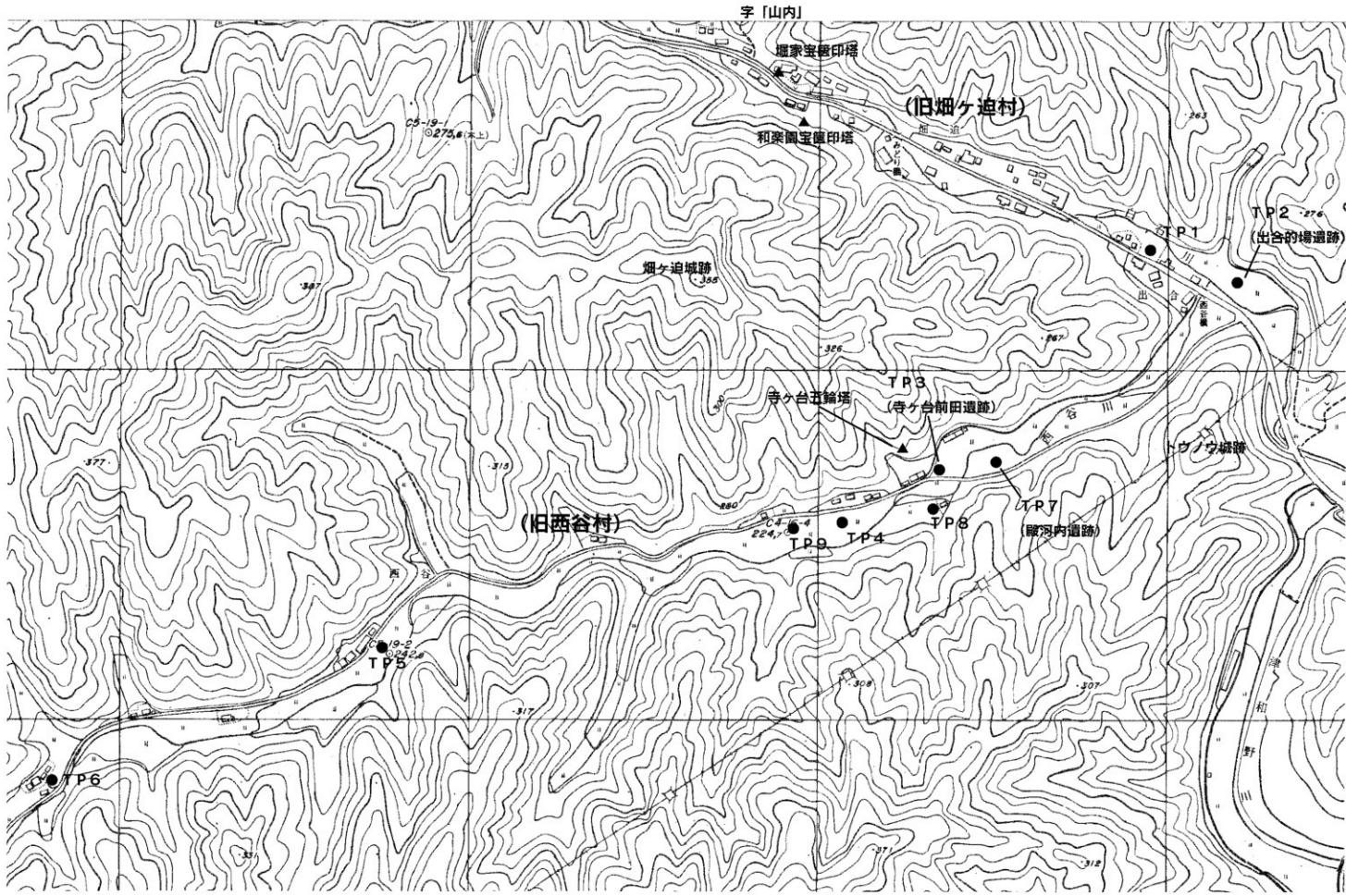


第1図 関連遺跡位置図 (1/50,000)

- 1 出合的場遺跡
- 2 殿河内遺跡
- 3 寺ヶ台前田遺跡
- 4 トウノウ城跡
- 5 煙ヶ追城跡
- 6 煙ヶ追遺跡
- 7 横家宝鏡印塔
- 8 伝山大将の墓
- 9 烟ヶ谷銅山跡
- 10 津和野城跡
- 11 木賀遺跡 (吉見氏居館跡)
- 12 高田遺跡
- 13 喜時雨遺跡
- 14 横瀬遺跡
- 15 大原遺跡
- 16 土井原遺跡



第2図 発掘調査対象範囲の現況図 (1/2,500)



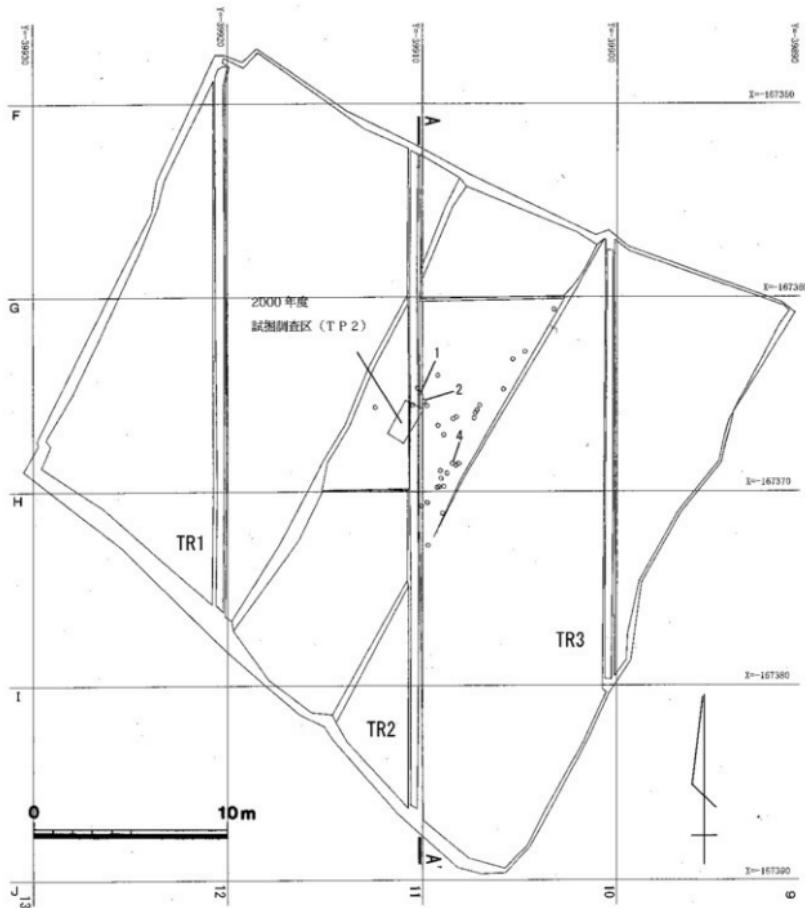
第3図 西谷出合地区試掘調査区配置図 (1/5,000)

### 第3章 発掘調査の結果

#### 第1節 出合的場遺跡の調査

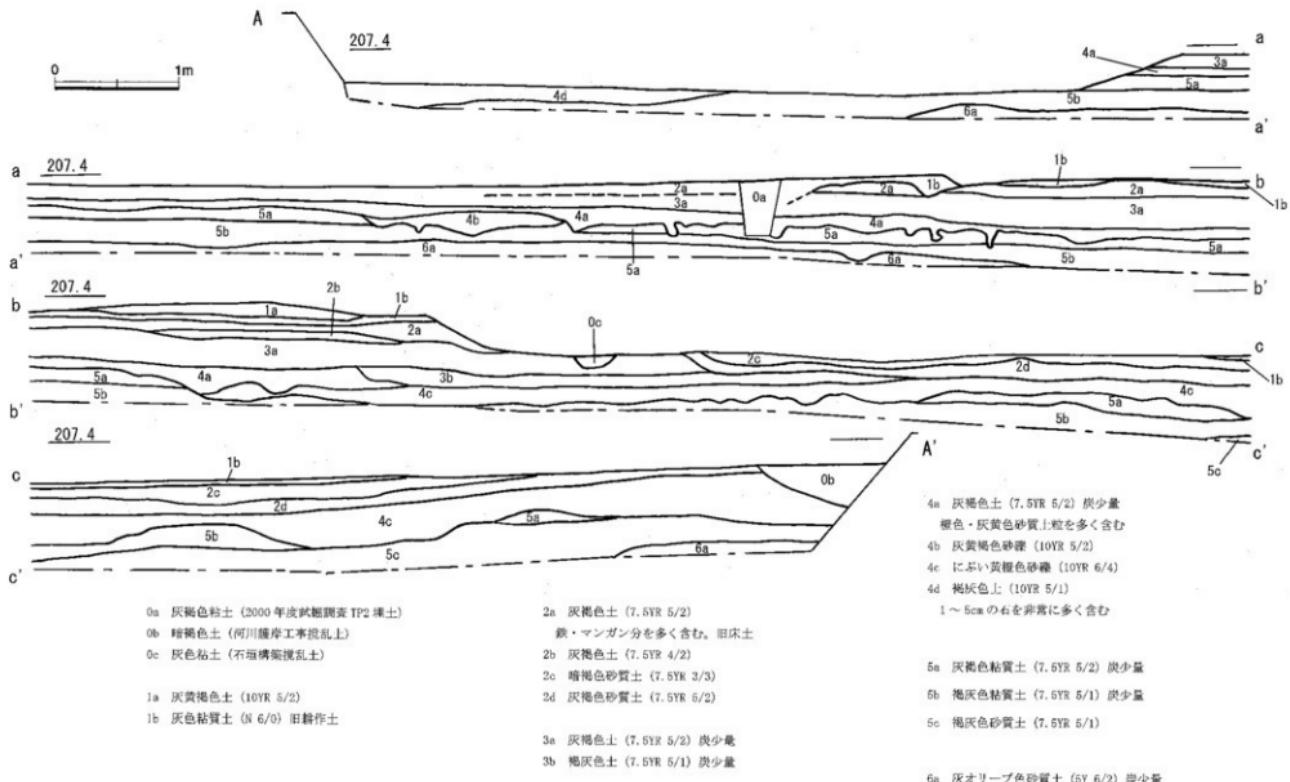
##### 1. 概要

古道（地籍図中のいわゆる赤線）の南側に設定した調査区である。この道は津和野藩主が領内を巡検する際に使用したと伝えられており、津和野城下と北方の木部地区を結ぶ主要な道であった。発掘調査の結果、遺構は確認できなかった。トレンチを3本発掘したところ、埋土は砂利層で、かつては水が流れ、洪水により一時に埋没したと考えられる。包含層からは、土師器底部、貿易陶磁器などが出土しており、中世以降に埋まつたと推定される。



第4図 出合的場遺跡調査区全図 (1/250)

○印は遺物出土地点。番号は第6図の遺物番号。



第5図 出合的場遺跡トレンチ2 土層断面図 (1/40)

トレンチ調査の結果、トレンチ2中間の試掘調査区TP2周辺で中世かと推定される遺物がまとまっていたことから、平面発掘ではこの範囲を中心に調査することとした。

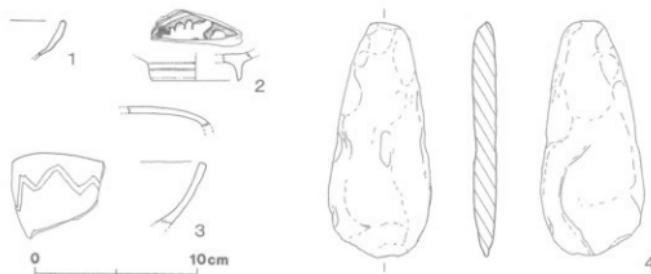
平面発掘の結果は、水田造成土中に遺物が出土する状況であり、造成土の厚い南東側を中心と遺物が出土した。平面調査の結果、遺構は確認されず、遺物も原位置を保った状況ではないと考えられたため、調査範囲中央部のみの平面調査とした。

## 2. 基本層序

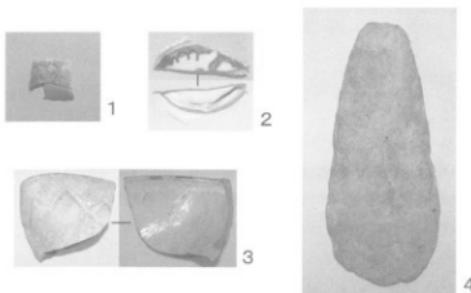
発掘前の表土および床土等は、重機によりあらかじめ除去した後のトレンチ上層断面である。基本層序は、搅乱土である第0層、旧水田の旧耕作土までの第1層、旧水田の造成土と考えられる第2層、灰褐色～褐灰色系の土である第3層、砂礫混じり土である第4層、灰褐色～褐灰色系の粘質土である第5層、灰オリーブ色系の砂質土である第6層に大別される。第3～6層には炭を少量含む土があるが、すべてが人為的なものであるかどうかは断定できなかった。出土遺物の多くは、旧水田の造成土と考えられる第2層に含まれていた。

## 3. 遺構に伴わない遺物

1は土師器皿の口縁部で、中世以降のものである。2は貿易陶磁器の青花碗で、16C後半のものである。3は内外面に黒灰釉のかかった陶器の向付で、外面には山形の沈線文が施される。茶道具の一つで、萩焼と考えられる。4は縄文期と考えられる打製石斧であり、砂岩製かと考えられる。



第6図 出合の場遺跡出土遺物 (1/3)



出合の場遺跡出土遺物

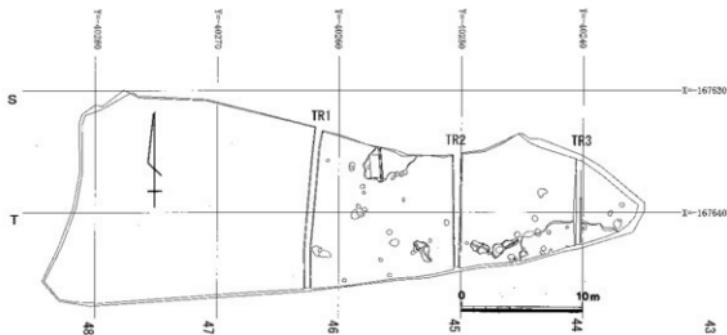
## 第2節 殿河内遺跡の調査

### 1. 概要

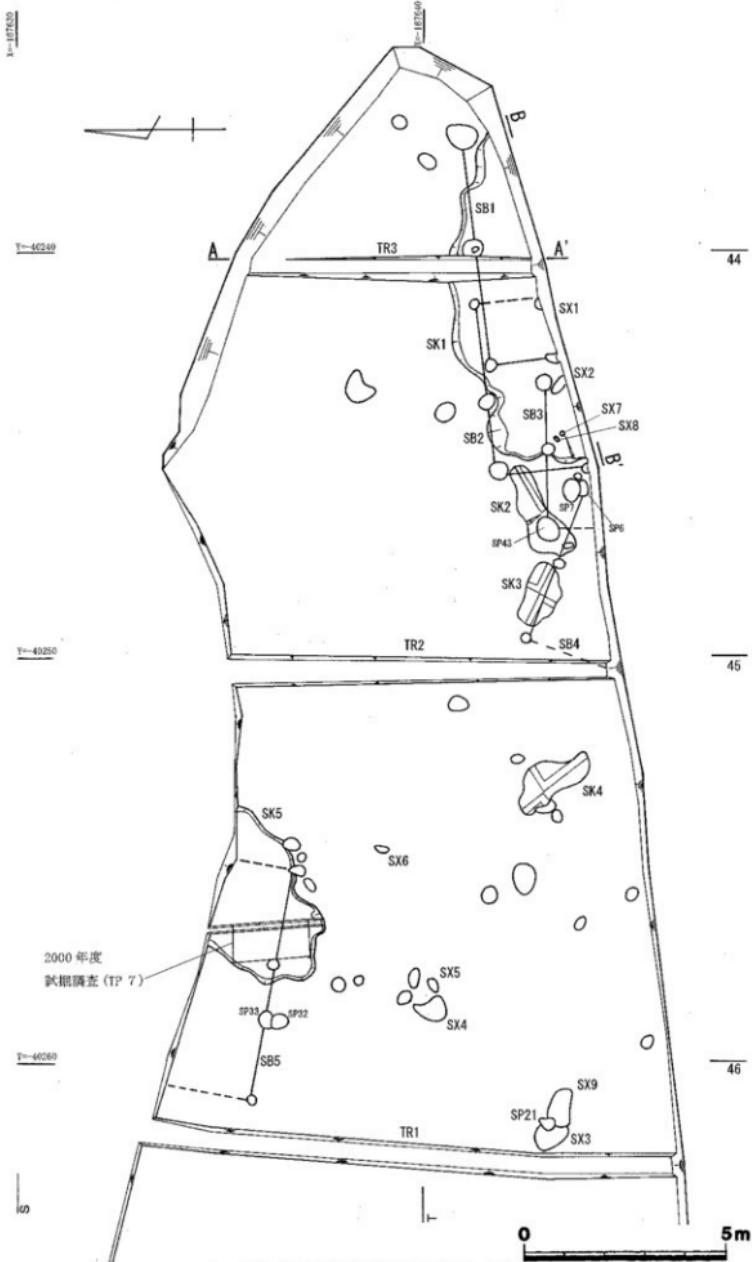
西谷川と背後の山に挟まれた  $100 \times 50\text{ m}$  四方以内の狭い範囲にある遺跡であることが、これまでの試掘調査の結果から推定されていた。今回の本調査の結果、遺跡西半は西谷川の氾濫原であり、遺跡東半で中世前期の集落跡の一部が発見された。遺跡西辺付近は後世の水田造成によって削平を受けており、遺構は発見できなかった。遺構には掘立柱建物跡 2 棟、土坑 6 基がある。遺跡の主体は、調査区外北側にあるものと考えられる。

### 2. 基本層序

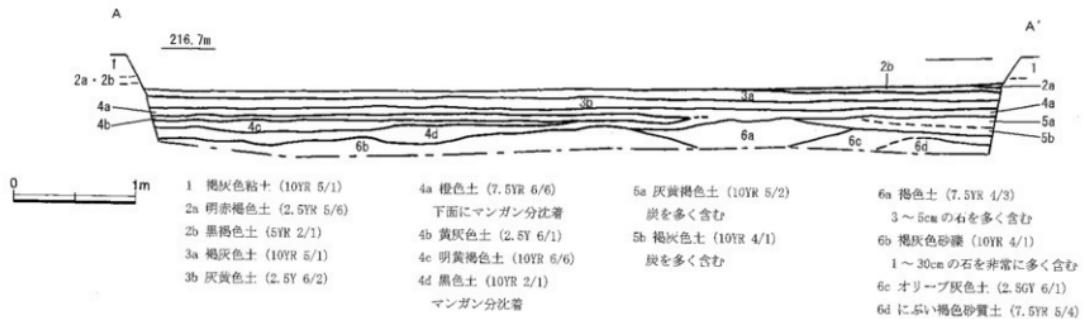
先行しておこなった試掘調査の結果から、発掘前の表土・床土、および近世以降の造成と考えられる土層は、重機によりあらかじめ除去した後のトレンチ土層断面である。基本層序は、搅乱土である第 0 層、現代の水田耕作土の第 1 層、現代の水田床土の第 2 層、近代以前の造成土あるいは旧耕作土と考えられる第 3 層、近代以前の水田の旧床土と考えられる第 4 層、中世包含層である第 5 層、無遺物包含層である基盤土の第 6 層に大別される。特に第 4 層の旧床土には、多量の硬化した鉄・マンガン分が沈着しており、遺構検出を困難にした。



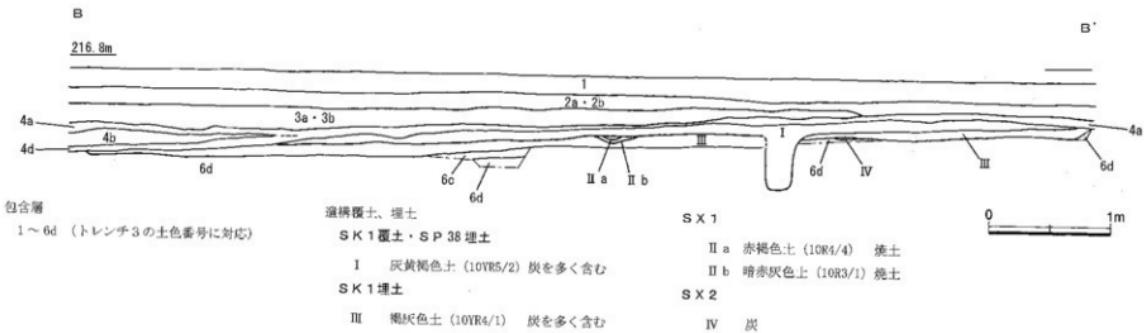
第 7 図 殿河内遺跡調査区全図 (1/400)



第8図 殿河内遺跡遺構配置図 (1/120)



第9図 殿河内遺跡トレンチ3北壁 土層断面図 (1/40)



第10図 殿河内遺跡調査区東壁 土層断面図 (1/40)

### 3. 遺構

発掘された遺構には、土坑・炭・焼土関連遺構、掘立柱建物跡、柱穴・ピットがあるが、紙面の関係から主要な遺構についてのみ図示した。

#### (1) 土坑

検出された土坑はいずれも約10cm以下と浅いものが多い。

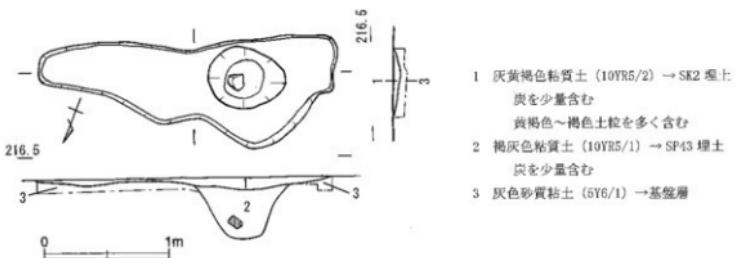
**SK1** 約 $8.4 \times 2.4$ m以上、深さ約6~2cmの浅い不整形土坑。土坑南半は、調査区外に続いている。調査区南壁の土層断面の検討により、SB1の柱穴であるSP38がSK1の埋土であるIII層を切って掘り込まれていることが確認できる。調査時にはI・III層をSK1埋土としていたが、再検討の結果、I層はSK1の覆土であり、III層のみがSK1の埋土であると考えられる。SK1の検出はI層上面と認識しておこなったことから、土坑底で検出したSB1~3の柱穴SP36~41については、本来SK1の埋土であるIII層上面にて検出されるピットを見落とした恐れがある。また、SB1~3が土坑と重なるため、掘立柱建物SB1~3のいずれかを建てる際の整地の痕跡が、土坑として残った可能性がある。なお、SK1の埋土であるIII層上面より焼土層SX1が検出された。SK1の底面であるIII層下面で炭層SX2・7・8が検出されている。中世以降の土師質土器小片および炭が出土。

**SK2** 約 $2.5 \times 0.95$ m、深さ約10cmの浅い不整形土坑。土坑底より、SB3を構成するSP43が、検出された。土層断面からSP43はSK2に先行すると考えられる。また、SK2南西隅底よりSP8が検出されたが、SK2と同時期か先行すると考えられる。炭が出土。

**SK3** 約 $1.5 \times 0.85$ m、深さ約6~4cmの浅い不整形土坑。中世以降の土師質土器小片および炭が出土。

**SK4** 約 $2.1 \times 0.85$ m、深さ約5cmの浅い不整形土坑。切り合いかから、西側にあるSP15に後出ると考えられる。出土遺物なし。

**SK5** 約 $3.5 \times 2.8$ m、深さ約4cmの浅い不整形土坑。土坑北半は調査区外に続いているが、後世の水田造成によって失われている。土坑南東部では、切り合いかからSK5に後出するSP27・29が検出されており、SP27はSB5を構成するピットと考えられる。同じSB5を構成すると考えられるSP42が土坑西半の底から検出されているが、鉄・マンガン分の沈着が著しく土坑上面で検出されるピットを見落とした恐れがある。SB5がSK5と重なるため、SK1と同様に掘立柱建物SB5を建てる際の整地の痕跡が、土坑として残った可能性がある。なお、2000年度試掘調査区TP7はSK5の西半の一部を調査していたことが今回の調査で分かった。中世以降の土師質土器小片および炭が出土。



第11図 SK2・SP43 (1/40)

## (2) 焼土・炭に関連した遺構

**S X 1** S K 1 上面で検出された焼土層で、焼成の強いII a層と焼成の弱いII b層に分かれる。II a・II b層を合わせた規模は約33×14cm以上、厚さ約5cmで南半は調査区外に続いている。その検出位置から、S B 1あるいはS B 2の床面に伴う炉跡等の痕跡である可能性が考えられる。

**S X 2** S K 1 下面で検出された炭層である。約22cm×52cm以上で南東隅は調査区外に続く。

**S X 3** 焼土・炭を伴った土坑である。切り合ひからS X 9およびSP 2 1に先行する。残存する規模は約80×60cm、深さ33cmである。北西側の壁面付近で、被熟した焼土層である4・5層が検出された。焼土直上には、木目が残る板状の炭層である3層が薄く検出され、焼土が顕著でなかった遺構南東半の壁面にも3・3'層が検出されている。S X 3の底面からは焼石が検出されている。これらの状況からS X 3内において火が焚かれたと考えられる。

**S X 4** 埋土に炭を多く含んだビットである。約65×55cm深さ7cm。

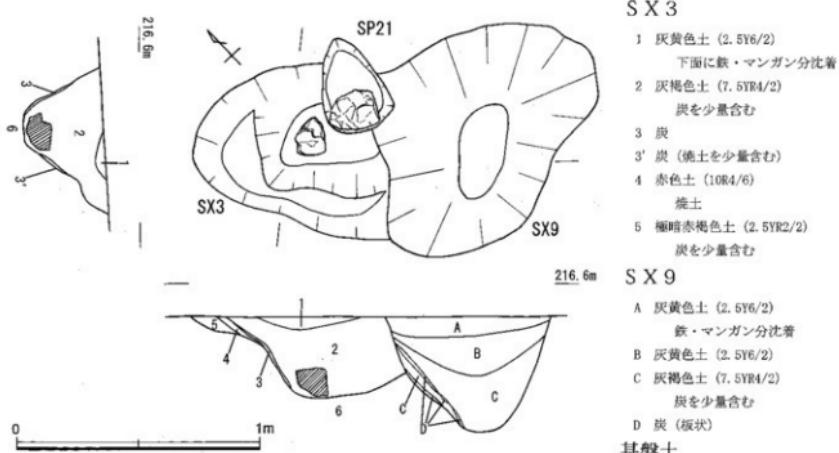
**S X 5** 埋土に炭を多く含んだビットである。約40×20cm深さ5cm。

**S X 6** 埋土に炭を多く含んだビットである。約30×15cm深さ4cm。

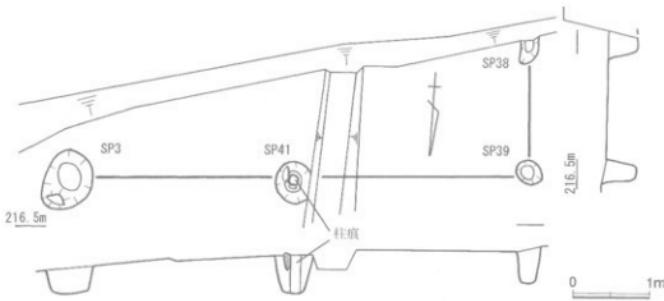
**S X 7** S K 1 下面で検出された炭層である。約10×8cm。

**S X 8** S K 1 下面で検出された炭層である。約16×8cm。

**S X 9** 現地調査時にはSP 44として発掘。後にS X 9に改める。切り合ひからS X 3より後出しし、SP 2 1に先行する。残存する規模は約95×80cm、深さ47cmである。北西側の壁面付近で、木目が残る板状の炭層であるD層が2枚重なって検出された。



第12図 SX3・SX9・SP21 (1/20)



第13図 SB 1 (1/60)

### (3) 挖立柱建物跡

推定した建物が重なり合うため、少なくとも2時期以上にわたって建て替えがおこなわれたと考えられる。

**SB 1**  $2 \times 1$ 間（約  $5.7 \times 1.7$  m）以上と考えられる。主軸は  $N83^\circ E$  である。建物の北西隅と推定され、建物南東側は調査区外に続いているものと推定される。SP41では、掘方埋土より暗い埋土で炭を多く含む径約 13cm の円形の柱痕が確認され、柱痕の東側の掘方埋土上部には焼石が埋まっていた。

**SB 2**  $2 \times 1$ 間（約  $4.3 \times 2.2$  m）以上と考えられる。主軸は  $N83^\circ E$  である。建物の北辺と推定され、建物南側は調査区外に続いているものと推定される。

**SB 3** 2間の柱穴列（約 3.7 m）として検出されたが、建物の北辺と推定され、建物南側は調査区外に続いているものと推定される。主軸は  $N89^\circ E$  である。SB 3 南端のSP43はSK 2に先行することが、SK 2の埋土から明らかである。なお、SP43には、ほぼ全面が焼けた川原石が1個埋められていた。

**SB 4** 2間の柱穴列（約 4.0 m）として検出されたが、建物の北東辺と推定され、建物南西側は調査区外に続いているものと推定される。主軸は  $N69^\circ W$  である。北端のSP 6はSP 7に切られている。

**SB 5** やや柱間が不揃いな3間の柱穴列（約 3.8 m）として検出されたが、建物の南辺と推定され、建物北側は調査区外に続いているものと推定される。主軸は  $N79^\circ W$  である。SP 3 はSP 3 に切られる。

## 3. 遺物

### (1) 遺構内遺物

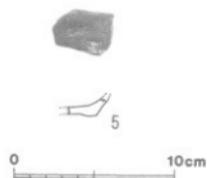
遺構内から出土した遺物のうち、図化できたものは1点のみである。5はSK 3の1層から出土した中世土師器の底部である。



### (2) 遺構外遺物

中世の遺物(6～19)と绳文時代の遺物(20～22)が出土している。

6～13は中世土師器で、6～8は口縁端部の残る皿、9は口縁端部の残る壺、10～13は底部の一部と考えられる。14～17は中世雜器類で、14～16は土師質焼成、17は瓦質焼成。14は鍋口縁、15は足鍋の体部で脚部が剥落した跡が残るもの、16は鉢口縁、17

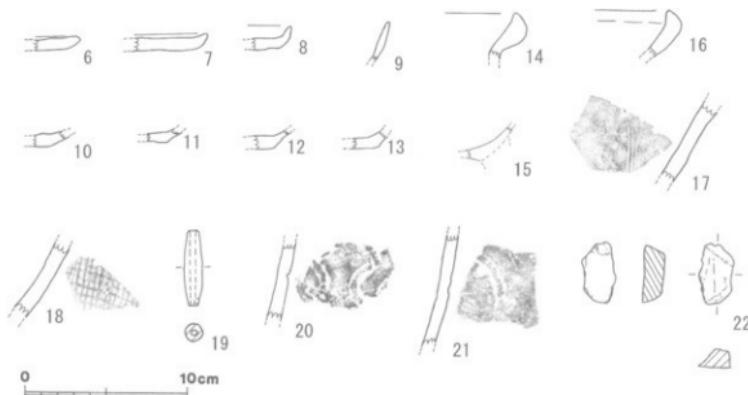


第14図 SK 3出土遺物

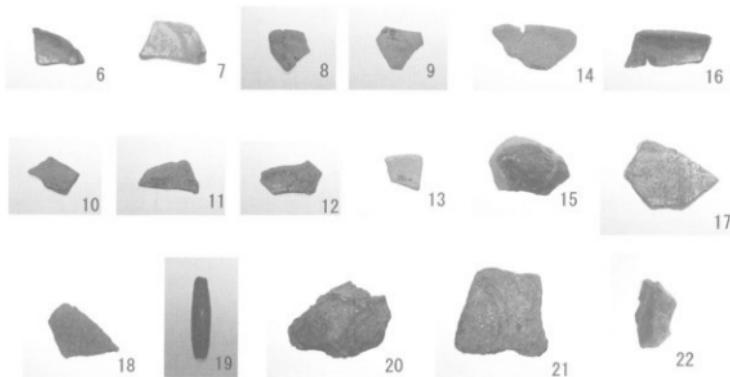
は擂鉢体部と考えられる。18は中世須恵器の体部で、外面には格子目タタキがある。19は土錐で、中世上器に伴うものと推定される。

20・21は縄文時代中期の並木式と考えられる縄文土器である（注1）。胎土に滑石を含んでいることから、外部からの搬入品である可能性が高い。外面には弧状の沈線文が施文されている。22はノッチの見られるチャート製の剥片である。人為的な遺物であるとすれば、縄文土器に伴うものと推定される。

（注1）渡辺聰氏のご教示による。



第15図 殿河内遺跡の遺構外出土遺物



殿河内遺跡の遺構外出土遺物

### 第3節 寺ヶ台前田遺跡の調査

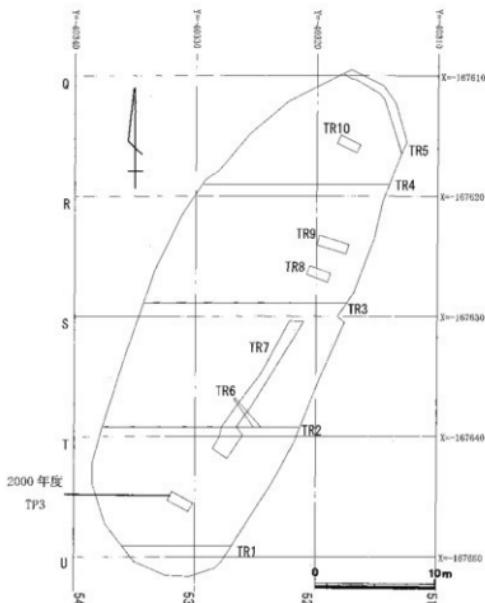
#### 1. 概要

前記2遺跡と比較して、中世の遺構・遺物が多く検出された遺跡である。

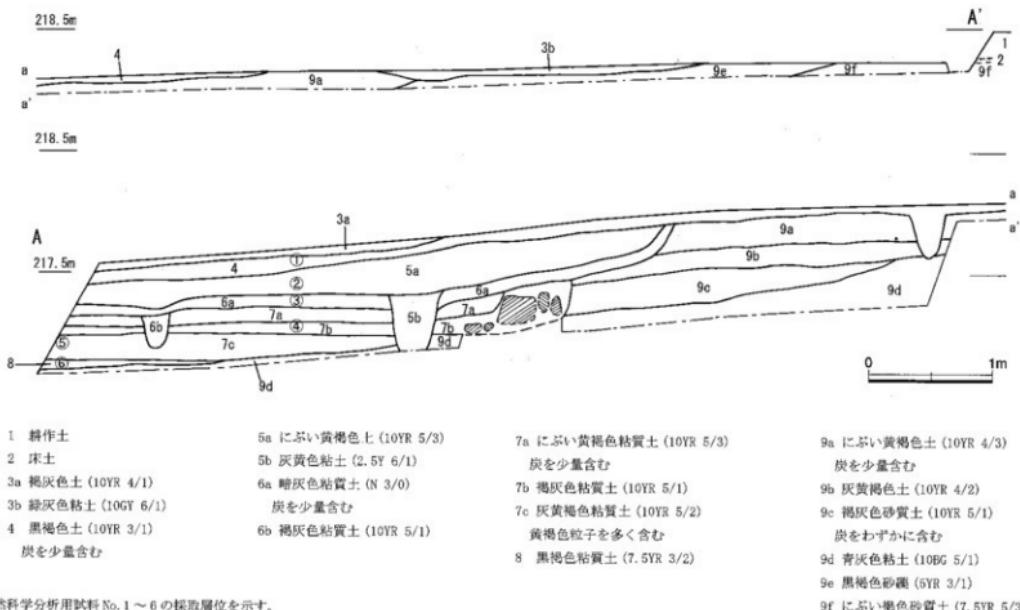
調査期間が限られていることから、ほ場整備で掘削される第1遺構面を主対象に平面発掘調査をおこない、第2・3遺構面については一部トレンチ調査によって確認調査を実施するに留めた。

#### 2. 基本層序

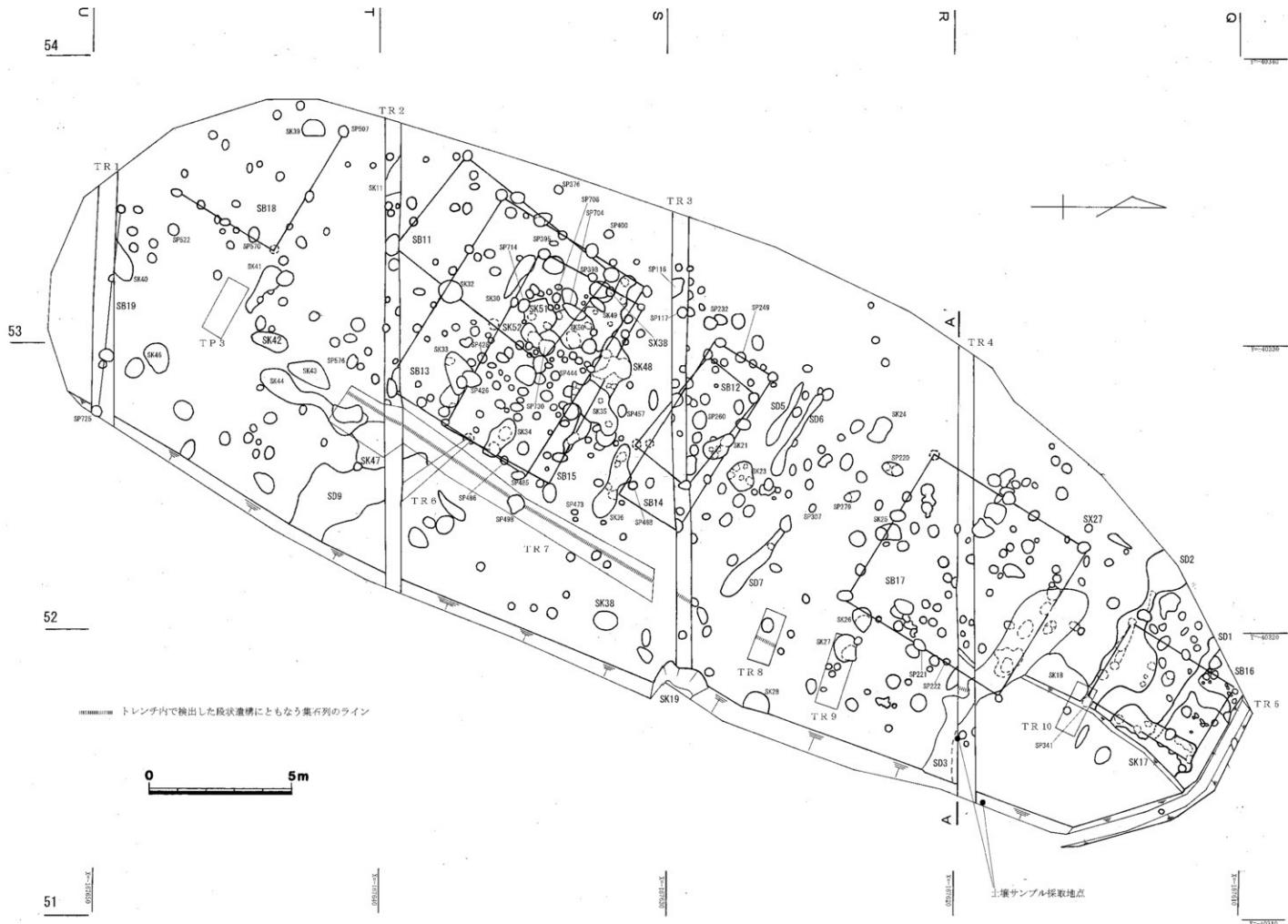
先行しておこなった試掘調査の結果から、発掘前の表土・底土、および近世以降の造成であることが確実と考えられる土層は、重機によりあらかじめ除去した後のトレンチ土層断面である。基本層序は、現代の水田耕作土の第1層、現代の水田底土の第2層、近世以降の水田造成土と考えられる第3層、第1黒色帶である第4層、第1～2黒色帶の間層である第5層、第2黒色帶である第6層、第2～3黒色帶の間層である第7層、第3黒色帶である第8層、第3黒色帶より下層である第9層に大別される。このうち、第4層以下が、近世前半期以前の遺物包含層および遺構面であり、第4層下面が第1遺構面、第6層下面が第2遺構面、第8層下面が第3遺構面である。いずれの層も水分を多く含んだ粘性土であり、柱材等の有機質遺物の残存状況が良好であったが、調査は冬季であることも加え難渋した。



第16図 寺ヶ台前田遺跡グリッド・トレンチ配置図 (1/400)



第 17 図 寺ヶ台前田遺跡トレンチ 4 南壁土層断面図 (1/40)



第18図 寺ヶ台前田遺跡遺構配置図 (1/120)

### 3. 遺構

寺ヶ台前田遺跡では、SK11～52、SD1～9、SX11～38、SB11～19、SP101～750（いずれも途中欠番あり）を確認した。紙面の関係から、一部の特徴的な遺構についてのみの図示説明となつことをお断りしておく。

#### （1）土坑

**SK 17** Q 51 Gで検出。長軸約3.3m、短軸1.3m以上。土坑の東半は、後世の水田造成によつて掘削されたと見られる段があるため、不明である。SK 17のほぼ中央を直交して、SD 1が切られている。底面の一部で、弱い焼土および炭を検出した。

**SK 19** R 51 G（TR 3の東端）の調査区法面において検出。土坑東側は後世の水田造成によつて失われており、西半のみが遺存していた。残存する規模は約1.7m×1.3mで、深さは約70cmであった。埋土は4層に分けられ、下半のC・D層には大量の石が埋まっていた。その石の大半は焼石であるという特徴を持つ。出土遺物は、小片のため図示はしていないが、焼けた壁土状の土製品9片が焼石検出までのところで出土している。

**SK 38** S 52 Gで検出。長軸約0.8m、短軸約0.65m。埋土より、瓦質土器鍋口縁部（23）が出土。

**SK 42** T 52・53 Gで検出。長軸約1.3m、短軸約0.6m。埋土より、土師器坏かと見られる底部（24）が出土。

**SK 47** T 52 Gで検出。長軸約1.6m、短軸1.2m以上、石の上面より底面までの深さ約17cm。北辺の状況は、トレーナー2の先行発掘により不明となったが、トレーナー内で終わっていたと推定される。土坑北西半からは、約5～35cmの自然石が検出された。石のうち一部には、被熱痕が見られた。石の上下の埋土からは、青磁盤の小片（25）、白磁の口縁部小片（26）が出土している。

**SK 48** S 52 Gで検出し、一部がS 53 Gにかかる。長軸約4.4m、短軸約1.4m。中央をSK 35が切っており、長い土坑が西半と東半に分断されていると理解した。埋土より、萩焼の陶器皿（27・28）、白磁口縁部（29）、土師器皿（30・31）、砥石（32）が出土。

**SK 51** S 53 Gで検出。長軸約1.3m、短軸約1.2m。主な切り合は、SK 50を切り、SK 52・SX 35に切られていると判断した。埋土より、瓦質土器足鍋の脚部（33）が出土。

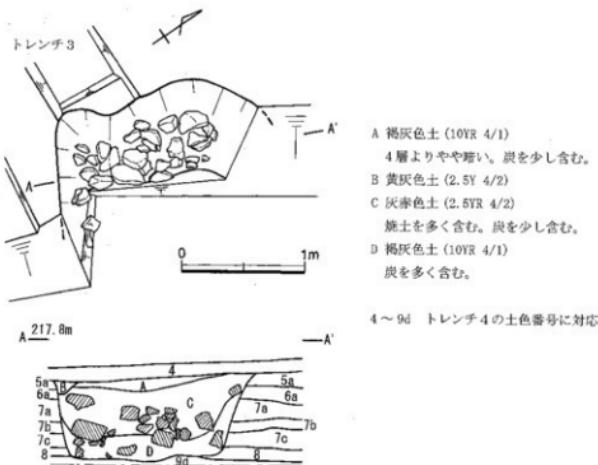
**SK 52** S 52・53 Gで検出。長軸約1.3m、短軸約0.6m。SK 51を切っていると判断した。埋土より、土師器口縁部（34）が出土。

#### （2）溝

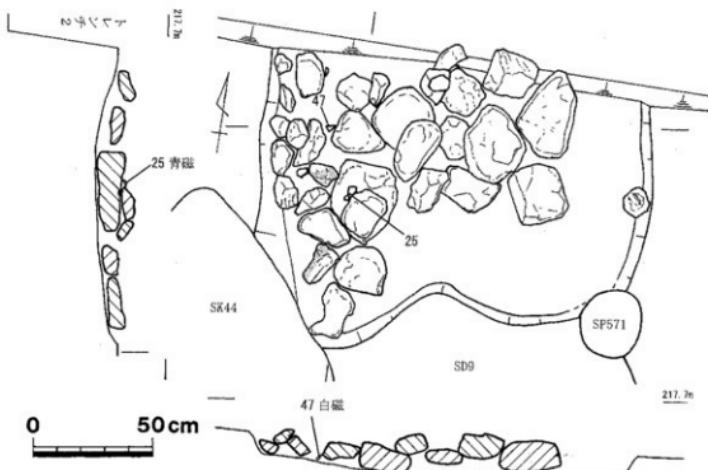
**SD 1** Q 51 Gで検出。長さ4.4m以上、幅約0.4m。検出時の遺構切り合いで、SD 1はSK 17に切られていると判断した。SK 17の東側断面AA'ラインにおいても、SD 1の断面が確認できなかつたことも、切り合を判断する材料とした。SD 1は途中で、北東方向に分岐しており、分岐した溝は両側に浅い段を持ち、やや幅広となる。

**SD 2** Q 51・52 Gで検出。長さ6.0m以上、最大幅約1.8m。埋土より、土師器皿底部小片（35）、土鍤（36）が出土。

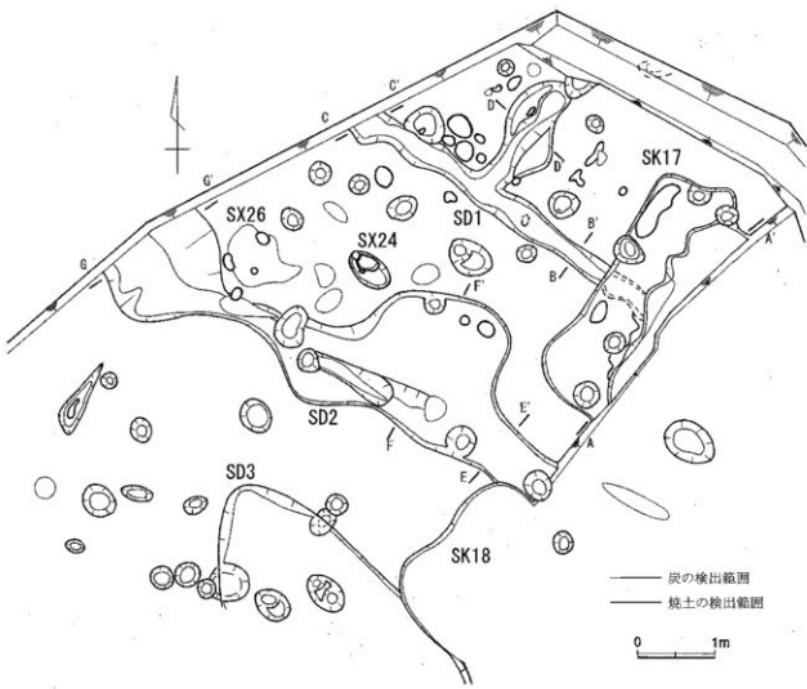
**SD 3** 調査区北部のQ・Rグリッド境で検出された溝で、長さ約9m、最大幅約1.8m、深さは上流側で約0.1mと浅く、下流側で約0.8mと深くなる。トレーナー4がSD 3を横断しており、トレーナー調査時には土坑（SK 13）として調査した。トレーナー4の東端土層断面は、このSD 3の土層断面を一部を図化している。調査区法面で溝の横断面を検討したところ、埋土は



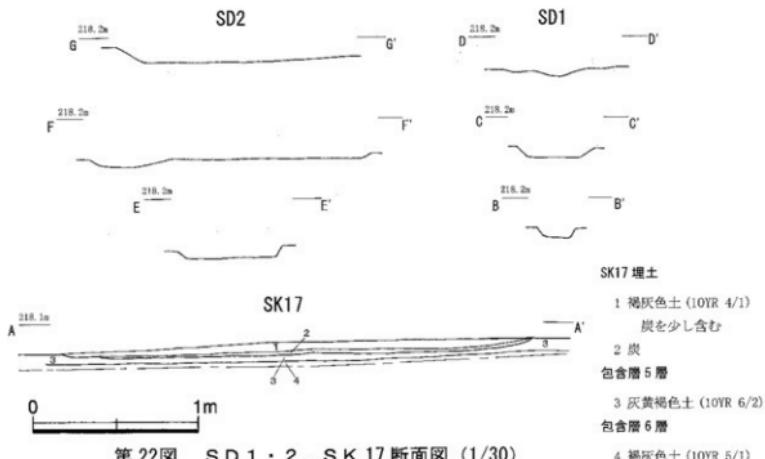
第19図 SK 19 (1/40)



第20図 SK 47 (1/20)



第21図 SD1・2、SK17周辺平面図 (1/60)



第22図 SD1・2、SK17断面図 (1/30)



第23図 SD 3 (1/60)

4層に分けられ、6a層から3a層まで長期にわたって次第に埋まっていた様子が確認できた。埋土中からは、15C代を中心とする遺物が多く出土しており、この頃に埋まっていたことが推定される。埋土より、青磁碗(37)、焼締陶器(38)、土師器皿底部小片(39)、中世雜器土器小片(40・41)が出土。

#### SD 4 (欠番)

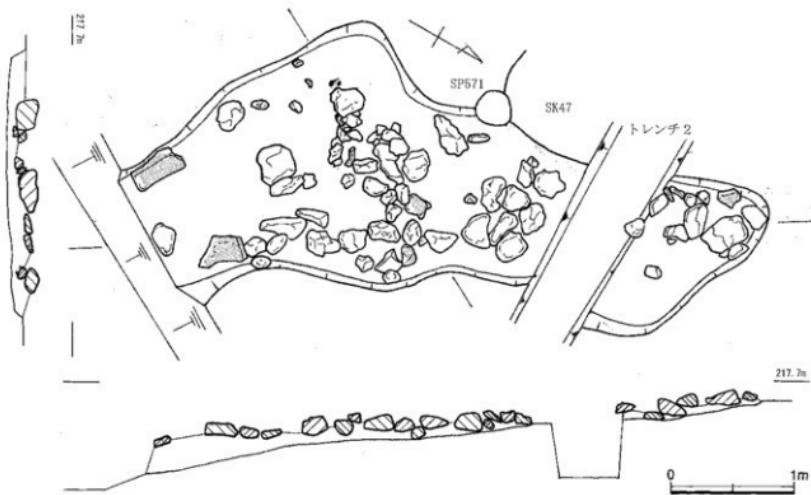
SD 5 R 52 Gで検出。長さ約2.5m、幅20cm。

SD 6 R 52 Gで検出。長さ3.3m、幅15cm

SD 7 R 52 Gで検出。長さ3.1m、幅50cm

#### SD 8 (欠番)

SD 9 S 52・T 52 Gで検出。長さ5.3m以上、最大幅約2.2m。溝の埋土中には、集石が含まれている。集石は、一部列状となっているようにも見られるが、石上面のレベルが水平ではなく、ゆるやかに傾斜して続いていることから、建物跡に直接伴う石ではないと考えられる。



第24図 SD 9 (1/40)

### (3) 炭・焼土関連遺構

調査区北端を中心に炭・焼土の広がりが確認された。焼土の大半は、強い焼けしまりではなく、比較的弱い被熱状態であった。調査時に水洗選別用のサンプル土壤を採取していないため、鍛冶遺構であるかどうかの断定は出来ないものの、S X 24 は形状から金床石であった可能性が高いと推定される。以下、特徴的な遺構の概要である。

**S X 24** Q 51 Gで検出した。長軸約59cm、短軸約29cm、深さ約8cmの土坑である。土坑の北半には、上面がほぼ平らでわずかに皿状に凸曲し、強く被熱した金床石状の石が据えられている。石の被熱面は、南東端を除く上面のほぼ全面と、北西辺、南西辺である。石に接した土坑北西端の上部には、焼土層が存在していた。

**S X 26** Q 51 Gで検出した。長軸約80cm、短軸約60cmの範囲で、炭の広がりと部分的な焼土層が確認された。

### S X 38

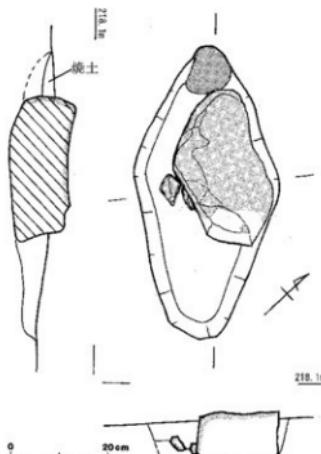
S 53 Gで検出した。当初はSP404として検出した遺構である。調査の過程で埋土に炭を多く含み、ピット下半で土師質土器の集積が確認されたことから、調査後にS X 38に改めた。規模は34×28cm、深さは8cmである。遺構の南東半の底面に土師質土器が5枚重なって出土した。上から43、44～45、46、47が出土しているが、現地調査時には4枚のみ（取り上げNo.A・B・C・D）と認識して取り上げたため、44と45を一括して取り上げてしまっている。出土状況は43～46が底面を上にして裏返した状況で、47のみが底面を下にして正位置で出土している。

#### (4) 段状遺構

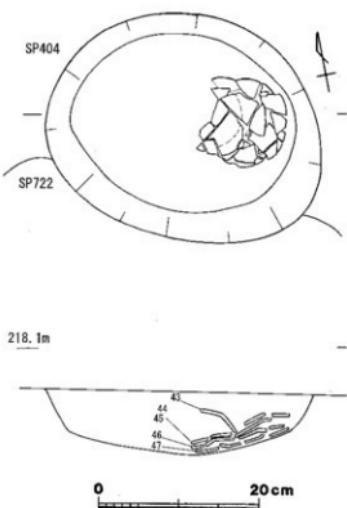
トレンチ2～4の土層断面において、7層の下に段状遺構の存在が確認されていたことから、これらの段状遺構が連続する一連の遺構であるかどうか確認するため、トレンチ7を設定した。また、トレンチ3～5の間においても、この段状遺構が続くかどうか確認するため、トレンチ8～10を設定してトレンチ調査をした。これらのトレンチ調査は、既に4層下面の遺構面の調査が終了しており、ほ場整備による掘削はない予定のレベルであったが、当遺跡の変遷過程を知る重要な遺構であると考えられたため実施したものである。

調査の結果、トレンチ7においては連続して段状遺構が検出され、トレンチ8においても段状遺構を示す土層が確認された。トレンチ9・10については、段状遺構がトレンチ内に入っているかどうか断定できなかった。

トレンチ7・8においては、段状遺構の下側（南東側）に集石列が確認されたことから、段状遺構を埋めて盛土造成する際に石を埋め込んだか、あるいは段状遺構にあった石積が埋められる際に破壊された跡である可能性もある。今回調査をおこなった第1遺構面のうち南東辺の下層には、段状遺構を伴つさらに古い中世遺構面が埋蔵されているものと推定される。

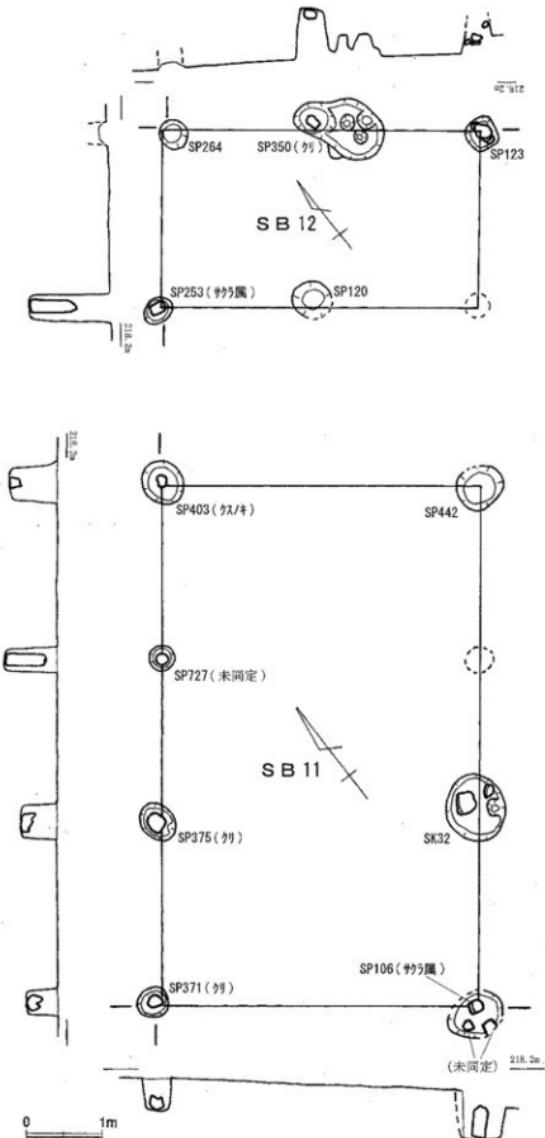


第25図 SX 24 (1/10)

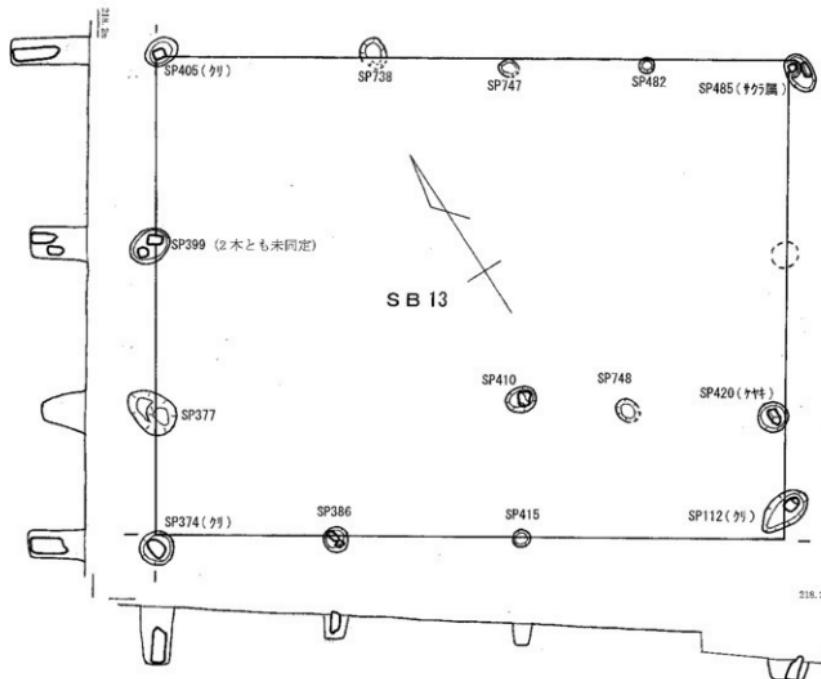
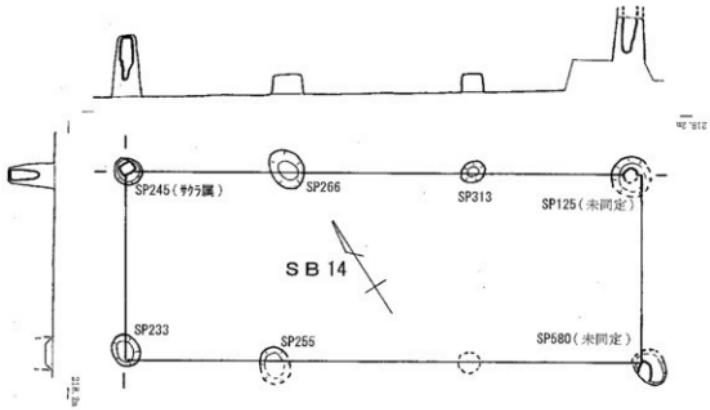


第26図 SX 38 (1/6)

(数字は遺物番号)



第27図 SB 11・12 (1/60)



0 1m

第28図 SB 13・14 (1/60)

### (5) 挖立柱建物跡

少なくとも3時期以上の建物跡が重複しているが、主軸からSB11と12、SB13と14がそれぞれ同時併存していたと推定される。なお、下記に推定した掘立柱建物跡を構成する柱穴から出土した柱根を主として、樹種同定をおこなっている。同定結果は、附編2のとおりである。

**SB11** 3間(6.6m)×1間(4.1m)の掘立柱建物を推定した。

**SB12** 2間(4.0m)×1間(2.3m)の掘立柱建物を推定した。

**SB13** 3間(7.8m)×3間(5.9m)の掘立柱建物を推定した。

**SB14** 3間(6.4m)×1間(2.2m)の掘立柱建物を推定した。

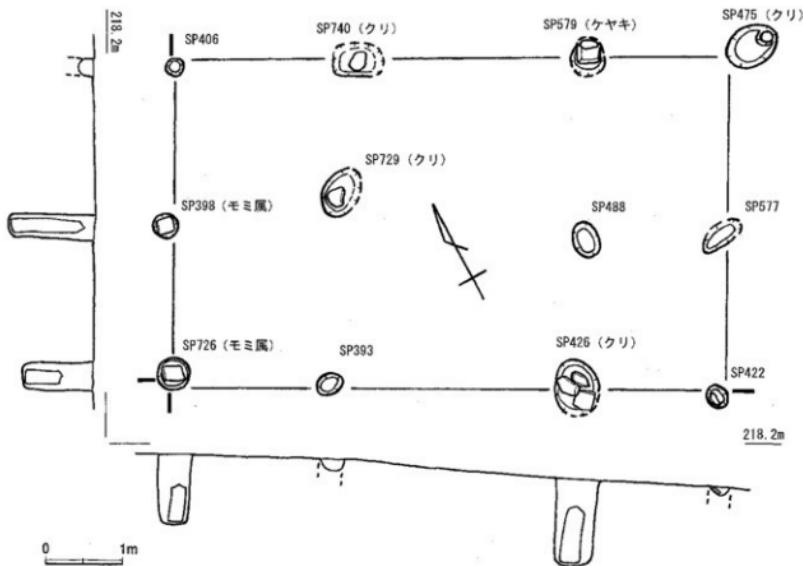
**SB15** 3間(6.9m)×2間(4.2m)の掘立柱建物を推定した。このうち、およそ半数のピット内に柱根が残っていた。SP398・726のみ針葉樹材であるモミ属の木が用いられており、他の柱穴の柱材が広葉樹材を多用している状況と比べて、明らかに特殊な状況である。SP398・726とともに隣接しており、この柱間が約1間となる1.9mであることから、この2柱穴が一連の建物を構成していたことはほぼ確実と考えられる。

**SB16** 2間(4.2m)以上×2間(3.0m)の掘立柱建物を推定した。

**SB17** 2間(6.3m)×2間(6.0m)の掘立柱建物を推定した。

**SB18** 2間(4.8m)以上×2間(4.0m)以上の掘立柱建物を推定した。

**SB19** 3間(7.0m)以上の柱穴列で構成される掘立柱建物を推定した。ただし、この建物跡のみ、他の建物跡と主軸が大きく異なっているため、復元に問題がある可能性もある。



第29図 SB15(1/60)

### (6) 柱穴・ピット

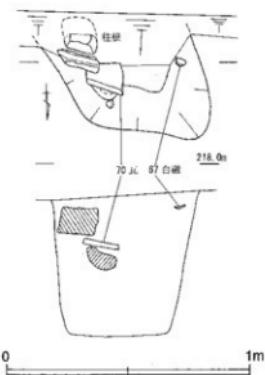
遺跡内からは、数百の柱穴・ピットが検出されたが、特記すべきは柱根の出土が多いことである。これは、遺跡の土質が水分を多く含んだ粘性土であることが、良好な保存に結びついた要因であったと考えられる。柱根の発見状況は、遺構面直上を発掘時または遺構面検出時に、地面にぼっかりと穴が空き、穴の下から柱根の上部が見えて発見されるということが多かった。このことから、柱材が建物建て替え時に当時の生活面（発掘の遺構面）で切られ、後に水田造成により埋められ、年月を経て乾湿を繰り返した柱の上部のみが腐朽し、周囲の土が粘性土であるために埋まることがなく空洞化したものと推定される。また、柱根は柱の上部が南東側（下側）に傾いた状況で発見されることが多かった。このことも遺跡の土質が粘性土であるため、当時生活をする段階において次第に建物が南東側（下側）に傾き、後に建物が廃絶された（柱が切断された）状況を示すと推定される。

以下は、一部の特徴的なピットである。

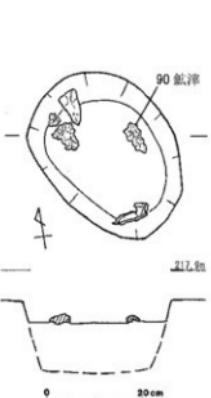
**S P 116** 柱穴の南東部からは柱根が検出され、掘方埋土中から無軸灰色の平瓦（70）と、白磁（67）等が出土した。

**S P 468** 埋土中から鉛滓が出土した。このピット中からの鉛滓の出土は、他のピットと比較して多い。

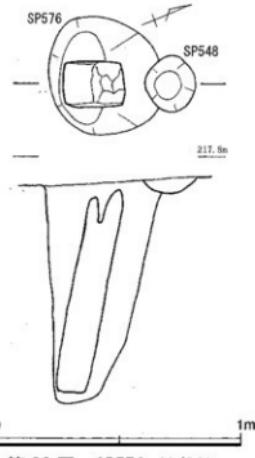
**S P 576** 柱根が良好に保存されていた柱穴の一つである。図面のとおり、柱根は柱穴内で大きく斜めに傾いた状態で検出された。



第30図 SP116 (1/20)



第31図 SP468 (1/10)



第32図 SP576 (1/20)

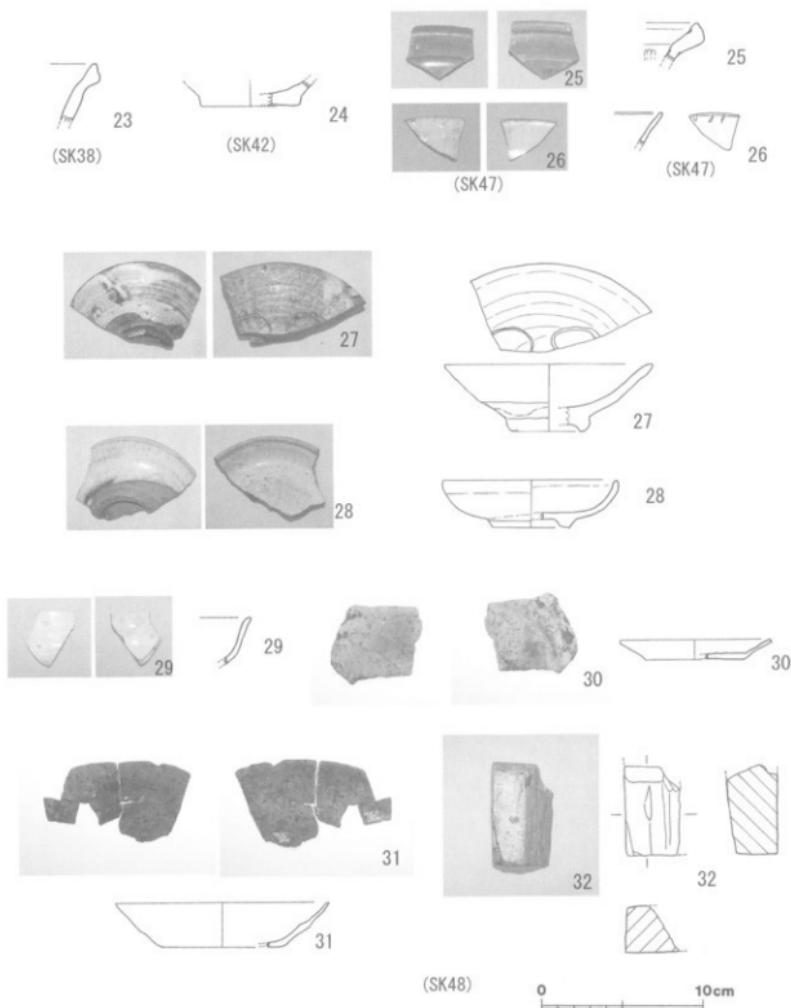
#### 4. 遺物

##### (1) 遺構内遺物

###### SK出土遺物

SK38 23 は瓦質土器の鍋口縁部であり、端部がやや肥厚する。

SK42 24 は中世の土師質土器底部で、やや厚く擬似高台風に外面に段を有することから、中世前



第33図 SK出土遺物 (1/3)

半期のものと考えられる。

SK47 25は青磁の盤口縁部で15C代頃かと考えられる。26は白磁で、口唇部は釉薬が剥げており、外面端部には凹凸が見られる。このほかに近世陶器も出土している。

SK48 27・28は萩焼の皿。27の内面見込には2枚貝状の目跡が残る。29は白磁で15C代頃かと考えられる。30・31は土師質土器皿。いずれもロクロ成形の薄手のつくりであり、砂粒を多く含み胎土不良。30の底部外面には板目状の圧痕が残る。32は砥石で、石材は流紋岩。端部を含め4面が残る。

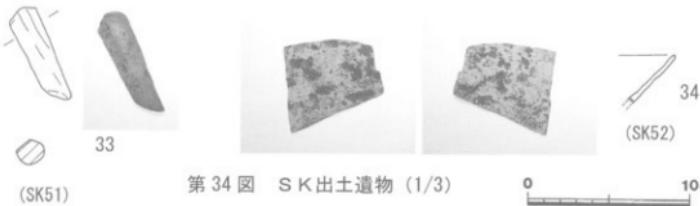
SK51 33はいわゆる足鍋の脚部で、端部が獸足状にやや曲がる。土師質焼成。

SK52 34は土師質土器皿の口縁部。ロクロ成形の薄手のつくりであり、砂粒を多く含み胎土不良。

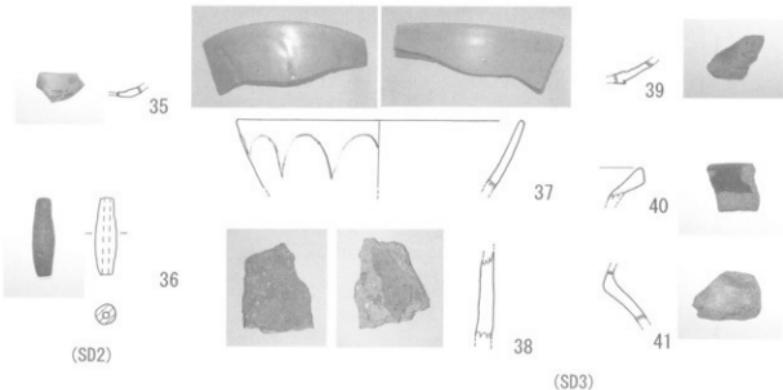
#### S D出土遺物

SD2 35は土師質土器皿の底部小片。ロクロ成形の薄手のつくりであり、砂粒をあまり含まず胎土は良好。中世後半期以降と考えられる。36は土鍤。

SD3 37は龍泉窯系の青磁碗B2類。外面に片切りの大きな蓮弁文がある。38は焼締陶器の体部で、外面は暗赤褐色でハケ目があり、内面は明赤褐色でナデ調整である。中世の在地系製品と考えられる。39は土師質土器皿の底部小片。ロクロ成形の薄手のつくりであり、砂粒をあまり含ま



第34図 SD出土遺物 (1/3)



第35図 SD出土遺物 (1/3)



ず胎土は良好。外面はわずかに擬似高台風に段を有しており、段部は沈線が入る。40は鍋の口縁で、端部はやや肥厚する。表面は黒く焼成されているが、焼成は弱く土師質である。41は肩部または頸部と見られる中世雜器の破片である。内外面ともナデ調整で、土師質焼成。

### S X 出土遺物

SX27 42は土師質土器皿の破片。ロクロ成形の薄手のつくりであり、砂粒をほとんど含まず胎土・焼成とも精良。

SX38 43～47は土師質土器皿。いずれもロクロ成形のやや薄手のつくりであり、砂粒をあまり含まず胎土・焼成とも普通。いずれにも底部外面には、板目状の圧痕が残る。色調は、43のみがぶい浅黄褐色を呈しているが、44～47は明赤褐色を呈する。

### S B 出土遺物

ピットに残されていた柱根の大部分は広葉樹材であるが、一部に針葉樹材のものが含まれる。柱根は断面円形のものと、方形のものの2種がある。

SB11

残存していた柱材を見ると、断面円柱形の柱で構成されていた建物であったと考えられる。

SP106 48は円柱形の柱材である。

SP371 49は円柱形の柱材で、底部付近のみが残っていた。

SP375 50は円柱形の柱材で、底部付近のみが残っていた。

SP403 51は円柱形の柱材で、底部付近のみが残っていた。

SB12

残存していた柱材を見ると、断面角柱形の柱で構成されていた建物であったと考えられる。

SP253 52は角柱形の柱材である。

SP350 53は角柱形の柱材の底部付近のみが遺存していたと考えられる。

SB13

SP374 54は円柱形の柱材の底部である。

SP485 55は瓦質土器の鉢口縁部である。口縁端部が内側にやや肥厚する。

SB14

SP245 56は断面角柱形の柱である。

SP580 57は断面円柱形の柱である。

SB15

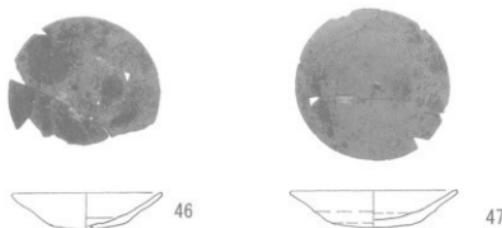
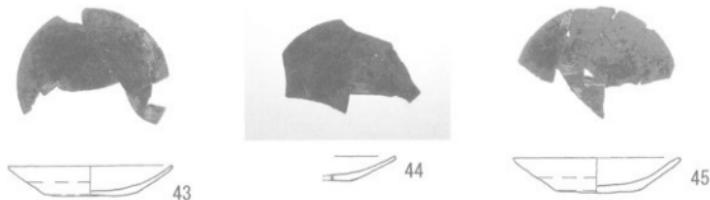
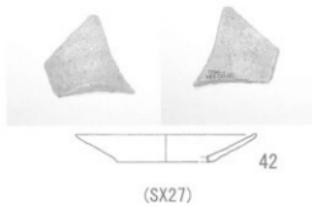
SP398 58は柱材で、断面形は角柱である。表面にはハツリ跡が顕著に残り、保存状況が良好である。樹種同定の結果は、針葉樹材のモミ属であった。59は中世雜器の鍋口縁部である。端部がやや肥厚する。表面がやや黒く焼成されているが、焼成は弱く土師質焼成氣味である。

SP426 60は柱材で、断面形は円柱である。表面には一部にハツリ跡が残り、保存状況が比較的良好である。61は、さし錢状で出土した錢貨である。保存状態が悪く分離していないため、錢種の確認は未了である。

SP579 62は柱材で、断面形は角柱である。底部付近のみが残存していた。

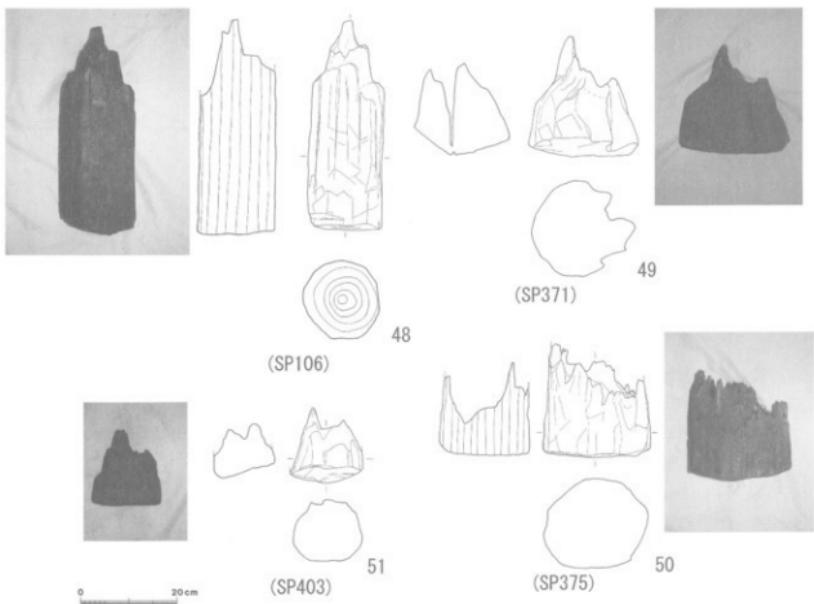
SB16

SP341 63は青磁の小皿口縁部である。

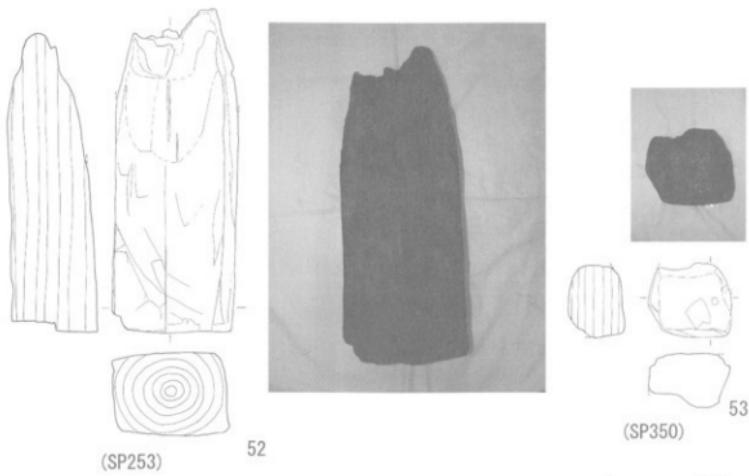


第36図 S X出土遺物 (1/3)

0 10cm



第31図 SB 11出土遺物 (48~51: 1/10)



第38図 SB 12出土遺物 (1/10)

SB17

SP222 64 は足鍋の脚部である。端部は獸足状にやや曲がる。瓦質焼成である。

SB18

SP507 65 は柱材で、断面形は角柱である。一部が欠けた状況で遺存していた。

SB19

SP725 66 は柱材で、断面形は円柱であると考えられる。底部付近のみが残存していた。

### S P (その他の柱穴・ピット) 出土遺物

SP116 67 は白磁のD群の坏口縁部である。68 は褐釉陶器の瓶で、中国産の16C代のものと考えられる。69 は土師質土器皿で、ロクロ成形による凹凸が顕著に残り、胎土・焼成とも非常に良好である。70 はいぶし瓦の平瓦である。

SP117 71 は銅錢で、鋒が進んでおり良好である。錢種は「咸平元寶」かと考えられる。

SP220 72 は陶器皿の口縁部で萩焼と考えられる。73 は表裏面に菱形の印刻の見られる青磁であるが、近世の日本産の可能性が高いと考えられる。

SP221 74 は土師質土器皿の底部、75 は土錘である。

SP232 76 は被熱痕のある土製品で、一部に湾曲した面が確認できる。

SP234 77 は断面形が円柱の柱材である。

SP249 78 は鋒で覆われた不明遺物である。非常に軽く、一部に面がある。

SP260 79 は初期伊万里系の染付碗で17C代と考えられる。

SP279 80 はスサ入りの土壁状の土製品であり、被熱痕がある。

SP307 81 もスサ入りの土壁状の土製品であり、被熱痕がある。

SP376 82 は擂鉢で瓦質の焼成良好なものである。口縁端部が内側に肥厚する。

SP395 83 は擦痕のある石が焼けて割れたものである。側面が砥石として用いられたと考えられる。石材は石英斑岩あるいは流紋岩と推定される。

SP400 84 は白磁のE 1群の皿である。

SP428 85 は擂鉢で瓦質の焼成良好なものである。口縁端部が内側に肥厚する。86 は断面形が円柱の柱材である。

SP444 87 は備前焼の小壺の口縁部と考えられる。

SP457 88 は青花碗F群の類で、16C末～17C初頭頃と考えられる。

SP468 89～91 は金属滓である。89 は発泡質状のもの、90 は流動状のもの、91 は炉底滓の可能性のあるものである。

SP473 92 は鉱石の可能性のある鉱滓状の破片である。他の鉱滓と比較して重量感がある。93 は黒碧石の可能性のある扁平な玉石である。暗灰色を呈し、石材は泥岩である。

SP486 94 は鍋口縁部である。端部は肥厚する、瓦質焼成である。

SP498 95 は青磁碗E群の底部である。

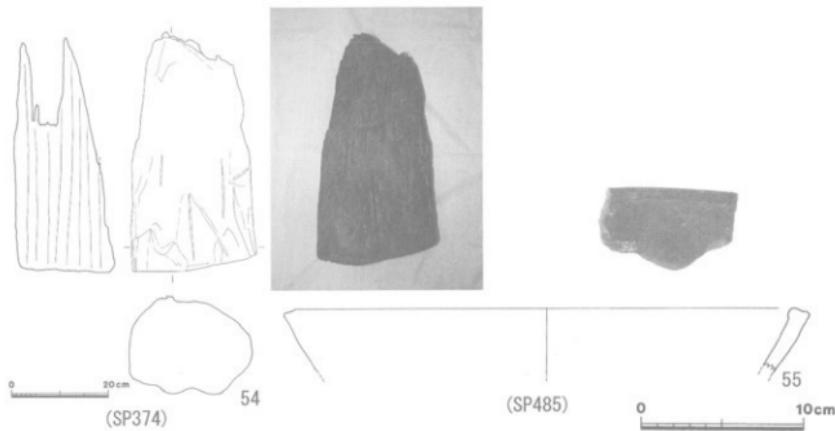
SP522 96 は薙灰釉のかかった陶器皿で、近世以降と考えられる。

SP544 97 は断面円柱形の柱である。

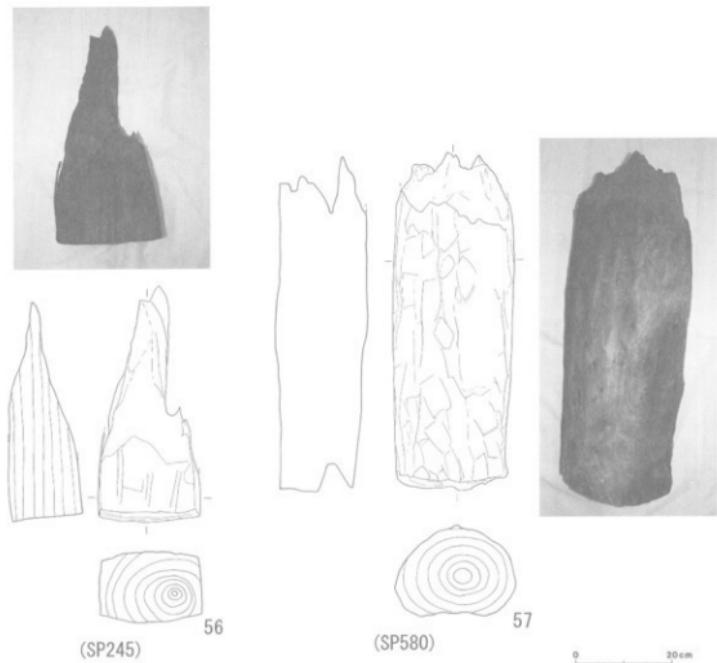
SP546 98 は断面角柱形の柱である。

SP576 99 は断面角柱形の柱である。

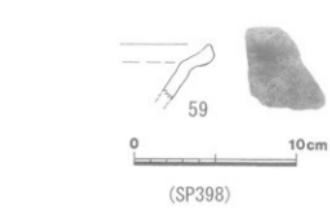
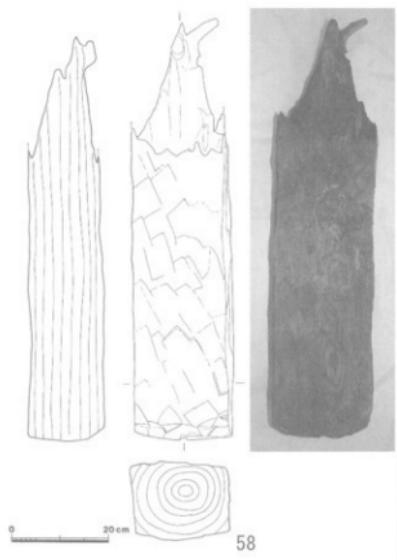
SP570 100 は土師質土器の底部破片である。外面には擬似高台状に段があり、中世前半期の可能性が高い。



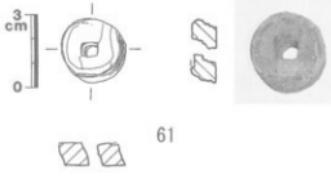
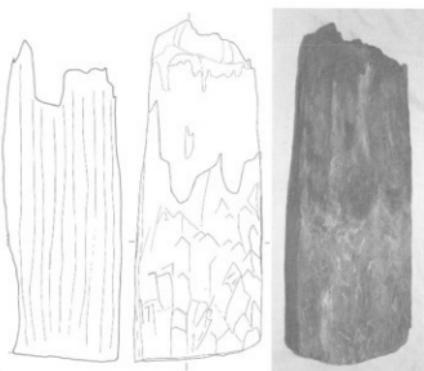
第39図 SB 13 出土遺物 (54:1/10、55:1/3)



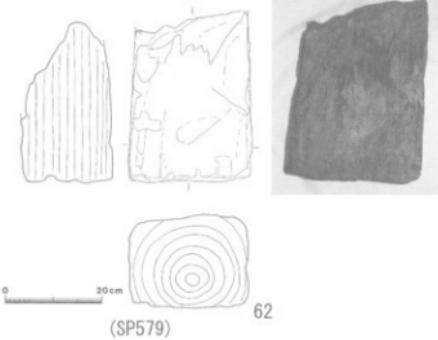
第40図 SB 14 出土遺物 (1/10)



(SP398)



(SP426)



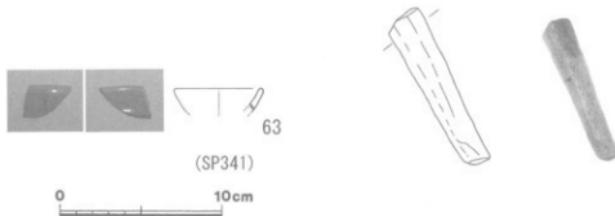
第41図 SB 15出土遺物 (58・60・62: 1/10、59: 1/3、61: 1/2)

SP704 101は中世須恵器の甕肩部で、外面には格子目タタキの痕跡が残る。102は土師質土器底部で、外面には擬似高台状の段がある。

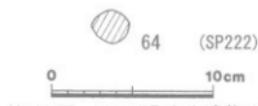
SP708 103は砥石で、焼けて割れたと考えられる。両端部以外の全面を使用している。石材は流紋岩質凝灰岩である。

SP714 104は土師質土器体部である。

SP730 105は青花碗C群で、16C半ばと考えられる。



第42図 SB 16 出土遺物(1/3)



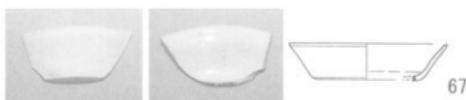
第43図 SB 17 出土遺物(1/3)



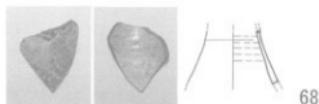
第44図 SB 18 出土遺物(1/10)



第45図 SB 19 出土遺物(1/10)



67



68



69

0

10cm

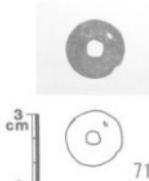


0 10cm



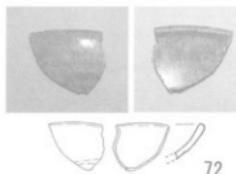
70

(SP116)

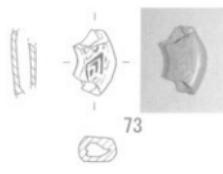


71

(SP117)



72



73

(SP220)

0 10cm

第46図 SP出土遺物 (67~69・72・73:1/3、70:1/4、71:1/2)



74

(SP221)



④ 75



76

(SP232)

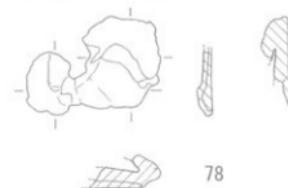
0 10cm



77

0 20cm

(SP234)



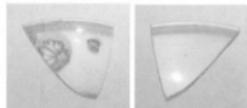
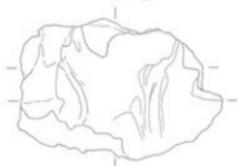
78



(SP249)

0 10cm

第47図 SP出土遺物 (74～76・78:1/3、77:1/10)



(SP260)

79



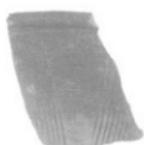
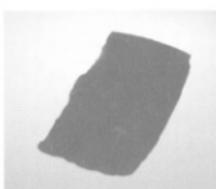
80

(SP279)



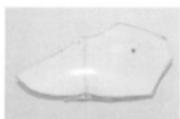
(SP307)

0 10 cm



82

(SP376)



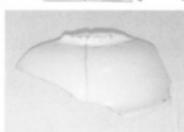
84

83

0 10 cm

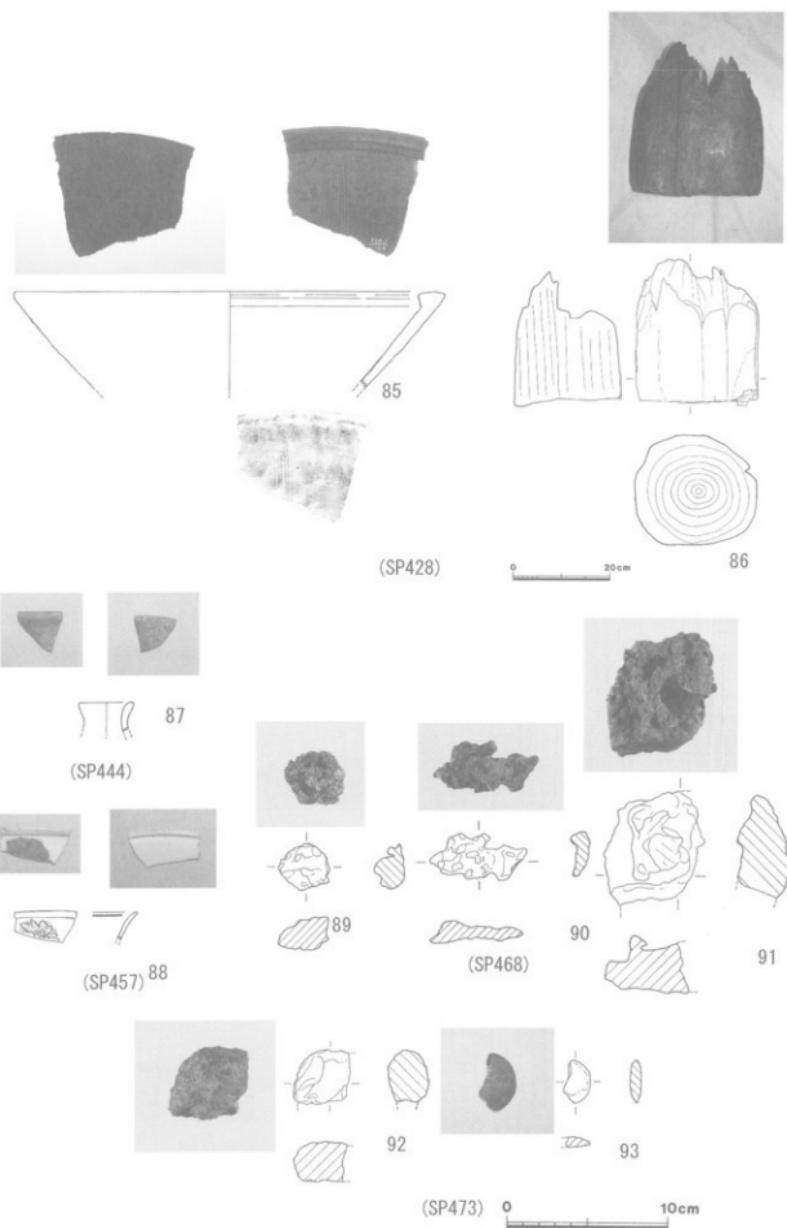


(SP395)

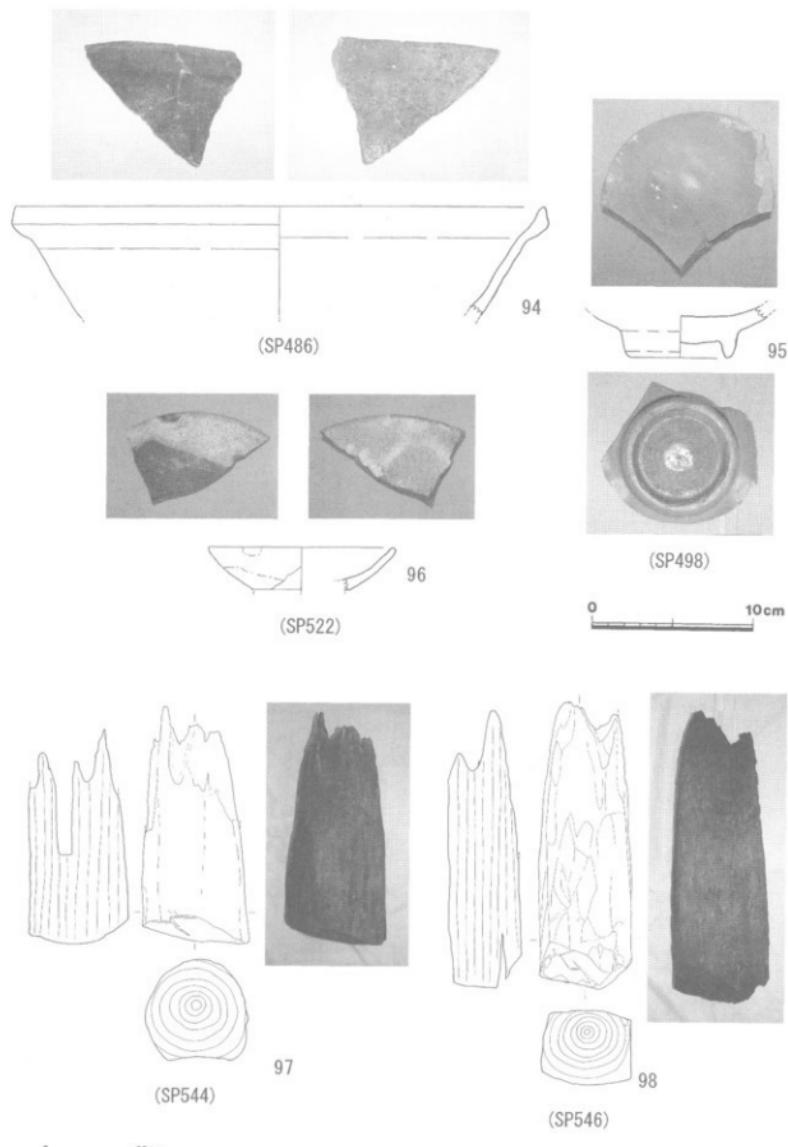


(SP400)

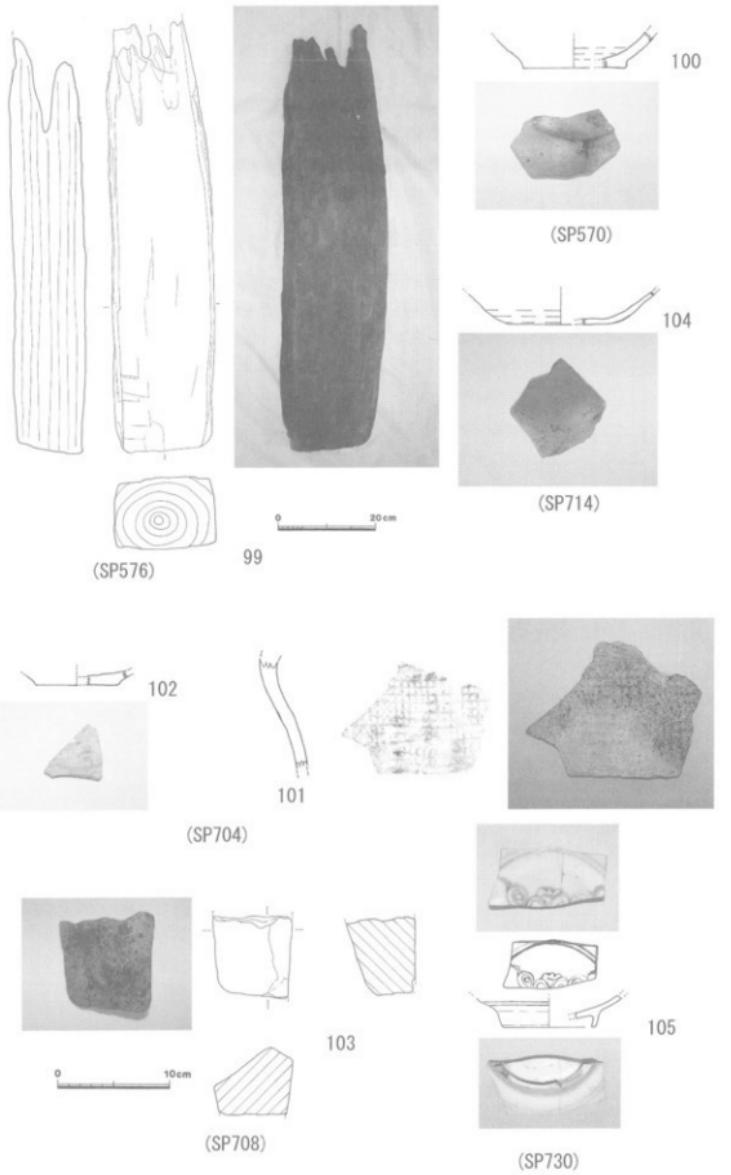
第48図 SP出土遺物 (79~82・84:1/3、83:1/4)



第49図 SP出土遺物 (85・87～93:1/3、86:1/10)



第50図 SP出土遺物 (94~96:1/3、97・98:1/10)



第51図 SP出土遺物 (99 : 1/10、100 ~ 102・104・105 : 1/3、103:1/4)

## (2) 遺構に伴わない遺物

### 中世～近世の遺物

106～110は中国製の白磁である。106は四耳壺の胴部と考えられ、中世初頭の遺跡の存在を示すものか、あるいは伝世品であった可能性もある。S53グリッド4層出土。107・108は白磁D群の口縁。107はTR10の5層出土。108はS52グリッドのTR7の6層出土。109は白磁E1群の底部。T53グリッド4層出土。110は白磁E2群。Q51グリッドの3層出土。

111～118は中国製の青磁である。111は龍泉窯系の皿の底部で、内面見込に花文が刻まれている。出土層位不明。112～115は青磁碗D類の端反りの口縁部。116は同じ青磁碗D類の底部。117～118は青磁の香炉。117が口縁部で内面は口縁端部のみ釉薬がかかり以下は露胎となる。118が底部で内面全体が露胎となり、ややにぶい褐色に変色する。

119～122は中国製の青花。119は染付碗B群の口縁部。120は染付皿B1群の底部。121は染付碗F群の口縁部。122は染付碗G群の口縁部。123～124は褐釉系の中国製陶器。123は天目茶碗の口縁部。124は褐釉陶器の瓶の頸部。

125～126は中国以外の貿易陶器で、朝鮮陶磁と考えられるもの。125は瓶の底部。内外面とも無釉の焼締陶器で灰色を呈する。126は雜釉陶器の碗口縁部。

127～139は国産の陶磁器。127は中世須恵器の甕肩部と考えられる。外面には格子目タタキがある。焼成は不良の瓦質焼成である。128～131は焼締陶器類である。128・129は中世備前焼の擂鉢。128は129と比較して小型品である。130は产地不明の焼締陶器の甕口縁部で、中世遺物のひとつと推定される。131は上半が失われている現状では台付の鉢に見える。近世後半以降の仏器のひとつである可能性がある。

132～134は瀬戸美濃焼。132は天目茶碗の口縁部。133は輪花皿の口縁端部、134は皿底部である。135～137は唐津焼。135は碗の口縁部。136～137は皿の底部。138はいわゆる初期伊万里系の染付磁器。139は蘆灰釉陶器の取手部である。

140～144は中世土師質土器の皿。140は厚い底部をしており、中世前半期にさかのぼると考えられる。141～144はロクロ成形の薄手の土器で中世後半期のものと考えられる。141～143は底部外面の稜が明確であるのに対して、144は稜が不明瞭であり、手づくね成形の京都系土師器皿を模した可能性がある。

145～156は中世以降の雑器類である。145は中世前半期の羽釜の鋸部で、土師質焼成。146～149は鍋である。146は鍋口縁部で、まだ肥厚してない口縁端を有する土師質焼成のもの。147・148は鍋口縁部で、肥厚する端部を有する瓦質焼成のもの。149は防長型のいわゆる足継の脚部で、端部が獸足状にやや曲がるもの。150～155は鉢でいずれも瓦質焼成。151～155には鉗目が付けられている。156は瓦質土器の甕口縁部と考えられる。

157～158は石製品類。157は砥石で、両端以外の4面に擦痕があり、一部には並行する線刻が見られる。158は白色の基石の可能性がある玉石で、石材はチャート。

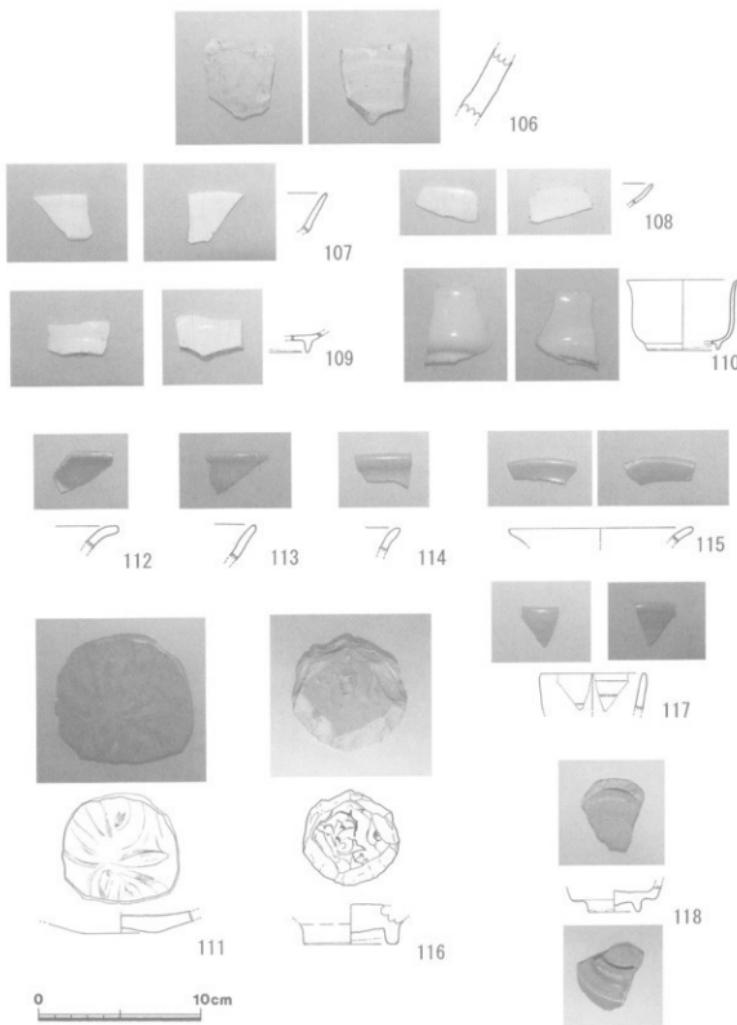
159～160は銭貨。159はさし銭状をして出土し、褐色系の鋸が表面を厚く覆っている。銭種は直接確認できないが、鋸の状況から寛永通宝の鉄銭である可能性が高いと考えられる。160は青銅鋸が著しく遺存状況不良のため、銭種確認不能。模鋳銭である可能性が高いと考えられる。

161～162は板状の鉱滓である。一見すると頁岩状の自然石かと見間違うが、石に比べ重量感がある。161には片面の縁に隆起帯が見られ、排滓の過程を示すと考えられる。162の片面には気泡状の粒が数点残る。

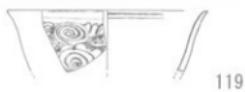
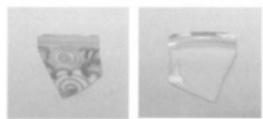
163は土製品。スサ入りの壁土状を呈する破片であり、少なくとも3面を有する何かの隅部である。被熱痕跡が見られる。

#### 縄文時代の遺物

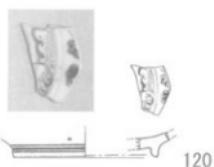
164～165は縄文時代の石器類。164は磨石で、石材は石英斑岩。165は石斧で、石材は泥岩。



第52図 遺構に伴わない遺物① (1/3)



119



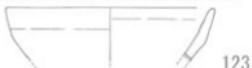
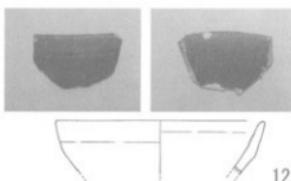
120



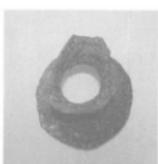
121



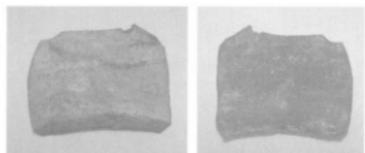
122



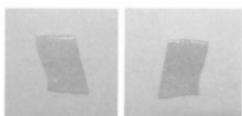
123



124



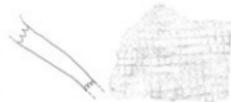
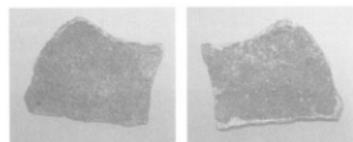
125



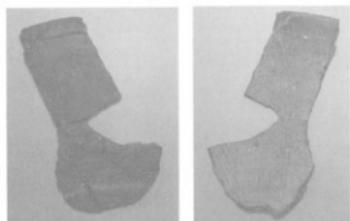
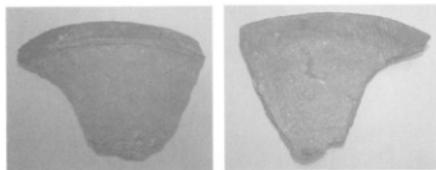
126



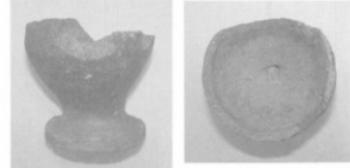
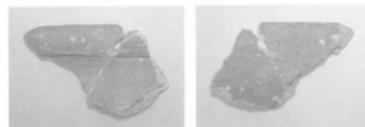
第 53 図 遺構に伴わない遺物② (1/3)



127



129



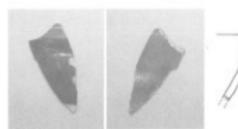
131



130



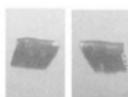
第 54 図 遺構に伴わない遺物③ (1/3)



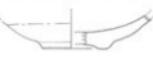
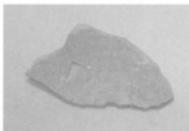
132



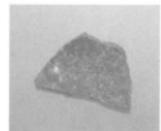
135



133



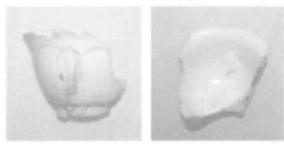
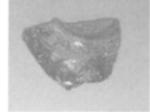
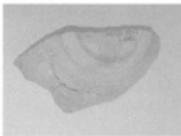
136



137



134



138



139



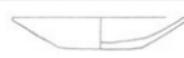
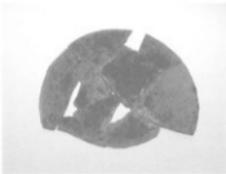
140



141



142



143



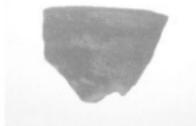
0

10cm



144

第 55 図 遺構に伴わない遺物④ (1/3)



146



147



148



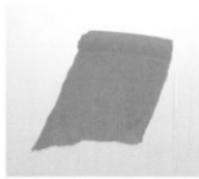
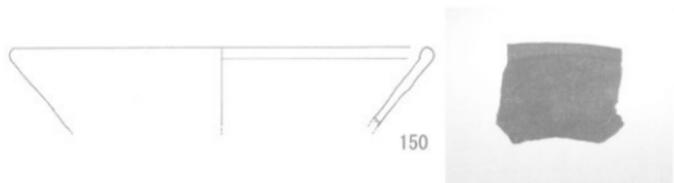
145



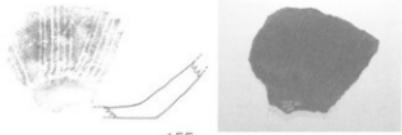
149



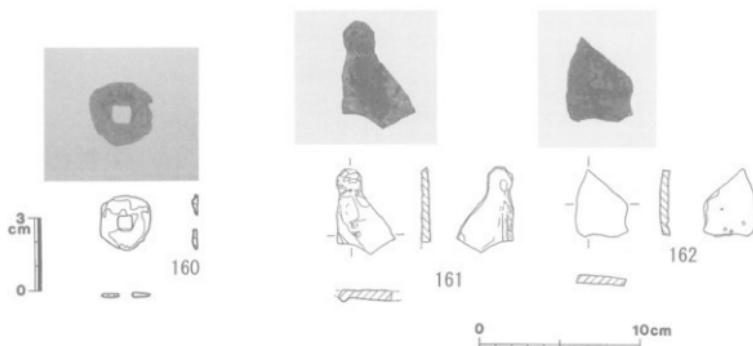
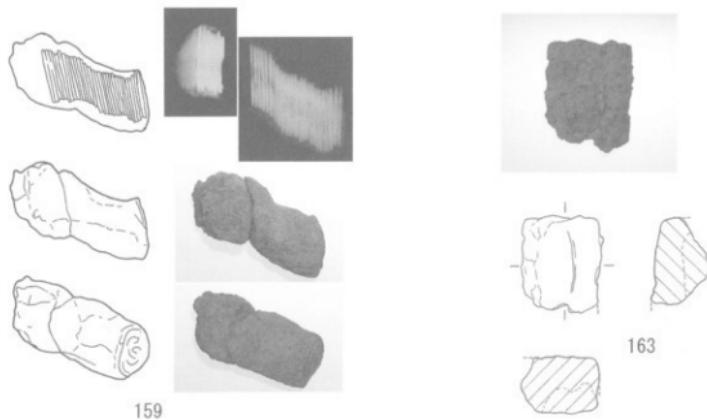
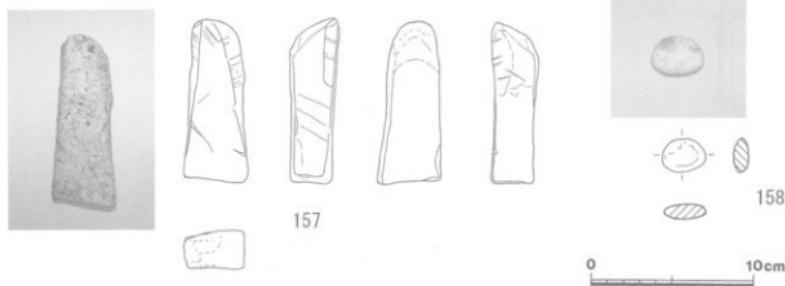
第 56 図 遺構に伴わない遺物⑤ (1/3)



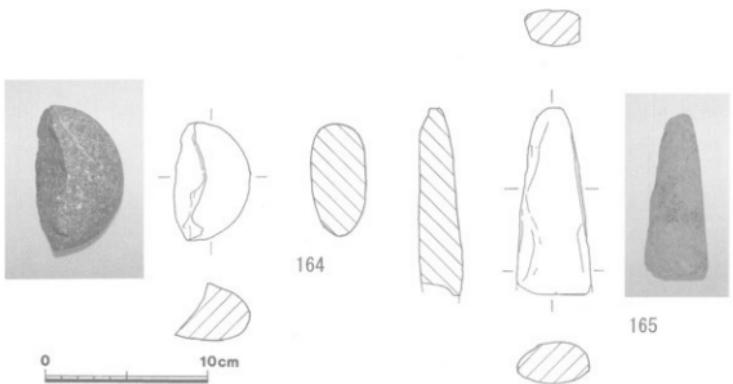
0 10cm



第57図 遺構に伴わない遺物⑥ (1/3)



第 58 図 遺構に伴わない遺物⑦  
(157 ~ 158, 161 ~ 163: 1/3、159 ~ 160 : 1/2)



第 59 図 遺構に伴わない遺物⑧ (1/3)

## 第4章　まとめ

これまで、『津和野町史』を執筆された沖本常吉氏が、文献史料の少ない中世以前の地域史を叙述するために、地名を手がかりに考察されてきた。西谷・出合地区においても、「的場」「殿河内」「寺ヶ台」「前田」などの字名が、中世の景観を復元する上で注目されてきた。このことを、発掘調査を通じて検証し、さらに地域の歴史を明らかにすることが、今回の調査の大きな目的であった。発掘調査の結果、上記の字名の残る場所のいずれからも中世遺物が出土しており、地域史解明にとって地名がひとつの有効な手がかりとなることが確認できた。また、いずれの遺跡からも少量ではあるものの、縄文時代に遡る可能性のある遺物が出土しており、意外に古くから人々が住み始めていたことが分かる。以下、遺跡ごとに特徴をまとめる。

### 1　出合的場遺跡

縄文および中世の遺物散布地である。縄文期かとみられる打製石斧が出土。出土遺物量は少量であり、中世以降のものが主体である。遺構は存在せず、遺物は水田造成土に含まれる状況で出土した。調査地は遺跡本体ではなく、小規模な遺跡が周辺に存在するとみられる。

### 2　殿河内遺跡

縄文中期の散布地、中世の集落跡である。滑石混じりの縄文土器が2点出土した。中世遺物は少量であるが、2時期以上の掘立柱建物跡と焼土・炭層を確認しており、この場所に中世集落が存在していたことが裏付けられた。

### 3　寺ヶ台前田遺跡

縄文の遺物散布地、中世～近世の集落跡である。縄文期かとみられる磨石が1点出土している。上記2遺跡に比較して遺物量が多く、今回の調査地点から西方にかけての範囲が、西谷地区の中世遺跡の主体であると考えられる。遺構面が伴うとみられる遺物包含層は4・6・8層である。出土遺物から、4層は16C代～近世、6層は15C代、8層はそれ以前である可能性が高い。遺構には焼土・炭の集中地点が多くあり、ピット内から焼石が出土することが多かった。

金属滓の出土は数点のみであったが、銅生産を直接示す板状鉱滓が2点出土した。板状鉱滓は遺物包含層3層および4層から出土しており、特に4層は16C代である可能性がある。遺跡周辺にある銅山としては笛ヶ谷銅山がある。近世～近代に主に稼動したが、歴史公報があり現在は閉山している。伝承によると中世の領主吉見氏入部と同時期の弘安年間（13C末）に開坑したといわれており、古くに開発された地点は寺ヶ台前田遺跡から約1km北の笛ヶ谷地区山内であるといわれている。今回出土した板状鉱滓は、旧笛ヶ谷村をはじめとした近世の天領でおこなわれていた銅生産にさかのぼる資料である可能性があり注目される。

他に特記する遺物としては、16C代の遺物を伴つたいぶし瓦がある。また、著しい湧水量のため調査は難渋したが、その反面、有機質遺物（柱材など）の保存状態が非常に良好であった。

今回の調査は、遺構の発掘および検討が十分であるとは言えないが、銅を含む金属生産をおこなっていた中世～近世の集落が、この地に存在していたことは明らかとなったといえよう。

## 津和野町寺ヶ台前田遺跡から出土した「鉱滓」について

奈良文化財研究所 村上 隆

### 1 はじめに

島根県津和野町寺ヶ台前田遺跡から、金属の製錬に伴い排出された「鉱滓」と思われる遺物が20数点出土した。これらの遺物は一括して出土したものではなく、また金属製錬の痕跡を特定できる遺構の検出もみていないため、体系的な調査にはならないが、それぞれの遺物の材質的な特徴をある程度把握しておくことは、この地域における今後の調査に対する基礎的知見を提供するものと考える。

### 2 調査に供した資料

島根県津和野町寺ヶ台前田遺跡から出土した、外見上金属の製錬に伴い排出された「鉱滓」と考えられる遺物、24点である。資料詳細を、表1に掲げる。

No.	取上番号	遺構・包含層層位	種別	法量(cm)	略測重量(g)	挿図番号
1	296	Q52、4層	滓	3.7 2.9 2.1	30	
2	683	T 53、4層	滓(板状)	4.1 3.3 0.5	16	第58図162
3	725	S53、3層	滓(板状)	5.3 3.2 0.5~0.7	22	第58図161
4	747	SP473	鉱石?	4.3 3.4 2.5	36	第49図92
5	1287	SP467	滓	3.4 2.5 2.1	14	
6	1289	SP468	滓(流動状)	5.9 2.9 1.6	22	第49図90
7	1290-A	SP468	滓	6.5 4.9 3.4	72	
8	1290-B	SP468	滓	2.7 2.3 1.4	10	
9	1292-A	SP468	滓(炉底滓?)	6.5 5.7 3.9	174	第49図91
10	1292-B	SP468	滓(発泡質状)	3.0 2.8 2.1	10	第49図89
11	1292-C	SP468	滓(発泡質状)	2.6 1.7 1.9	4	
12	1292-D	SP468	滓(発泡質状)	1.3 1.1 0.8	1	
13	1292-E	SP468	滓	4.5 3.6 3.0	46	
14	1292-F	SP468	滓	2.4 2.3 2.0	8	
15	1292-G	SP468	滓	2.6 2.2 1.4	10	
16	1292-H	SP468	滓	2.2 1.4 1.4	6	
17	1292-I	SP468	滓	2.2 1.4 1.3	4	
18	1292-J	SP468	滓	1.8 1.4 1.2	2	
19	1292-K	SP468	滓	1.6 1.2 1.0	2	
20	1292-L	SP468	滓	1.4 1.3 0.9	1	
21	1404-A	SP735	滓?	4.1 3.3 2.5	20	
22	1404-B	SP735	滓?	4.0 1.9 1.8	8	
23	1404-C	SP735	滓?	3.3 2.2 1.7	6	
24	542	SP249	材質不明の遺物 (金属質?)	8.2 6.0 2.0	42	第47図78
番外	-	遺跡周辺	結晶質石灰岩	- - -	-	

表1 寺ヶ台前田遺跡出土の金属生産関連遺物一覧

### 3 調査方法

調査は、主に非破壊的手法による蛍光X線分析による表面からの分析を行った。ただし、確実に鉛鉱とみなせる資料No.2、No.3に対しては、断面の顕微鏡観察を行うとともに、走査型電子顕微鏡による観察と微小部分の元素分析を行った。また、No.4、No.9の2資料に対しては、資料断面の光学顕微鏡を用いた詳細な観察を実施した。なお、蛍光X線分析は、奈良文化財研究所において実施した。その他の分析は、㈱コベルコ科研において行った。

### 4 結果と考察

蛍光X線分析による非破壊的な分析では、ほとんどの資料において鉄を主成分とし、他の金属元素が微量に含まれる状況しか窺えない。その中で特に注目するのは、資料No.2、No.3である。どちらも薄い板状の形状を持ち、一見同種の鉛鉱に見える。しかし、資料No.2は、蛍光X線分析により、主成分の鉄(Fe)とともに、金属元素として亜鉛(Zn)、鉛(Pb)、などが、微量ながら観察された。一方資料No.3からは、主成分が鉄であることは同様であるが、鉛とともに銅(Cu)がこれも微量ながら検出された。

資料No.2とNo.3を詳しく比較検討するために、資料断面の精査を行った。資料の一部を注意深く採取し、これを樹脂に包埋後、丁寧に研磨した。それぞれの断面を顕微鏡観察した結果を図1と図2に示す。外見では、同じように見えた両者の微妙な差異が読み取れる。資料No.2では、微小に濃淡はあるものの比較的均一な基地組織に、大きいものでは $200\text{ }\mu\text{m}$ 程度の空隙が散見し、その中に金属質で詰まつたものが随所に見受けられる。また、資料No.3では、かなり大きな針状組織が全体を走り、その中に非常に微細な金属粒がランダムに存在することがわかる。

両者を構成する組織の材質を詳しく把握するために、走査型電子顕微鏡によってミクロな観察を行った(図3、4)。資料No.2の基地組織は、主に鉄とシリコン(Si)の酸化物からなるファイアライト( $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ )である。温度がある程度上がった( $600^\circ\text{C}$ 以上か)ことで、本来ならムライト( $\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{SiO}_2$ 系)化が進むと考えられるが、鉄がリッチなため、シリコンがファイアライト化し、所々コラণダム( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )が六角板状に析出していることがわかる。そして、その基地組織中に生じた空隙を埋めるようにバイライト( $\text{FeS}_2$ )と鉛(Pb)が析出していることがわかる。石見銀山遺跡における科学調査において、銀製鍊に伴って排出されたカラミの分析によって作成したフローチャート1)に基づくと、このような板状のカラミ(鉛鉱)は、製鍊の第2~3段階あたりで排出されたものと考えられるが、残念ながらバイライトと鉛の析出が、鉛石の種類と製鍊される金属を短絡的に語ってくれるとは限らない。造漬剤として方鉛鉱( $\text{PbS}$ )が添加されたことに起因する可能性もあり、ここでは、硫化鉛物を始原とした金属製鍊工程において排出された鉛鉱とするに留める。

一方、資料No.3は、詳細な分析の結果、針状に走るファイアライトの間隙を埋めるように析出したムライトが織り成す基地組織中に、細かく分散していたのは硫化銅( $\text{CuS}$ )に外周を包まれたほぼ純銅のコアを持つ銅粒であることがわかった。これらの結果から、資料No.3は、硫化銅鉛石から銅を製鍊する工程に伴い排出された鉛鉱と考えてよからう。なお、基地組織と銅粒の双方、特に銅粒中に地球化学的分類で親銅元素や親鉄元素に相当する金属元素、例えば、ヒ素(As)、アンチモン(Sb)、スズ(Sn)などが微量に残留しているようであれば、鉛石の地球化学的特徴を反映する指標として注目できるが、今回実施した分析では特にこれらの元素の検出をみなかった。

資料No.4は、表面からの蛍光X線分析では、大半を鉄が占め、若干のマンガン(Mn)、鉛、亜鉛(Zn)などの元素を検出した。なお、試料断面の光学顕微鏡観察からは、鉛鉱としての特徴も見えない。